

第3節 戸津・林地区窯（林窯群）の工人組織と須恵器編年

1. はじめに

戸津・林地区には古代I1期(田嶋明人氏の古代土器編年案に基づく、田嶋1988)に位置付けられる須恵器窯が今回報告の林タカヤマ窯も含めると、8基確認されており、その全ての窯が発掘調査されている。戸津・林地区では他に須恵器窯の分布が予想される箇所はなく、既に削平された区域に未知の窯が存在する可能性はあるものの、1型式内での生産グループとしてはこれを大きく上回ることはない予想する。つまり、一つの窯場における一時期の須恵器窯がほぼ完掘された状態であり、この資料を整理することによって、工人単位の復元や工人組織と帰属の問題などが可能と言える。また、工人組織ごとの窯の前後関係を出せば、窯場編年ができる訳であり、当窯場での型式変化とその特徴を整理することによって、古代I1期の型式設定の基礎並びに他地域と編年対比する上での有効な資料提示ができるものと考える。具体的には、8基の須恵器窯を対象とし、須恵器の形態的特徴及び製作特徴を整理する。これは工人（単位）の抽出とグルーピングを目的とするが、工人がどのようにして窯を移って行ったかを主目的としており、厳密な意味での工人組織復元にまで論を展開して行かない。大まかな形での窯場内工人の組織編成を理解することに努める。また、その際に、須恵器窯構造や窯道具等の須恵器窯業技術の面からも照合して行きたい。以上を第1部とし、第2部として、その組織編成分けした窯グループでの窯編年を作成し、型式変化を両者対比の上で考察する。両者の型式変化の特徴と同時期での形態の幅、新旧器種の組み合わせの違いなど、型式設定をするうえでの問題点と整理し、従来の型式に対する当資料の位置付けを再整理する。なお、本稿では戸津・林地区の須恵器窯群を一つの窯場と把握し、これを林窯群と呼称する。林窯群はタカヤマ支群、オオカミダニ支群、六字ヶ丘支群の3支群からなり、窯名はこれを冠して番号を付す。

2. オオカミダニ支群と六字ヶ丘支群の須恵器坏A類型再整理とタカヤマ支群との比較

本文報告で述べたように、タカヤマ支群の須恵器は、1・2号窯と3号窯とで異なる特徴があり、前者は六字ヶ丘支群、後者はオオカミダニ支群に共通する要素が確認されている。ここではオオカミダニ支群と六字ヶ丘支群の須恵器坏A類型を整理するとともに、タカヤマ支群との比較を通して、三支群間での共通要素を明瞭なものとしたい。なお、須恵器坏Aを特に取り上げたことについては、どの窯でも最も個体数が多く、窯間での比較が容易で、成形・調整、細部形態に作り癖が明瞭に出る器種であるため、作り癖を整理することで工人に迫れる可能性が高いためである。製作に携わる全工人が坏A製作に携わっていたとは断定できないが、单一器種に絞れば、最も工人を反映する器種であると言えよう。

(1) オオカミダニ支群の須恵器坏A類型とタカヤマ支群

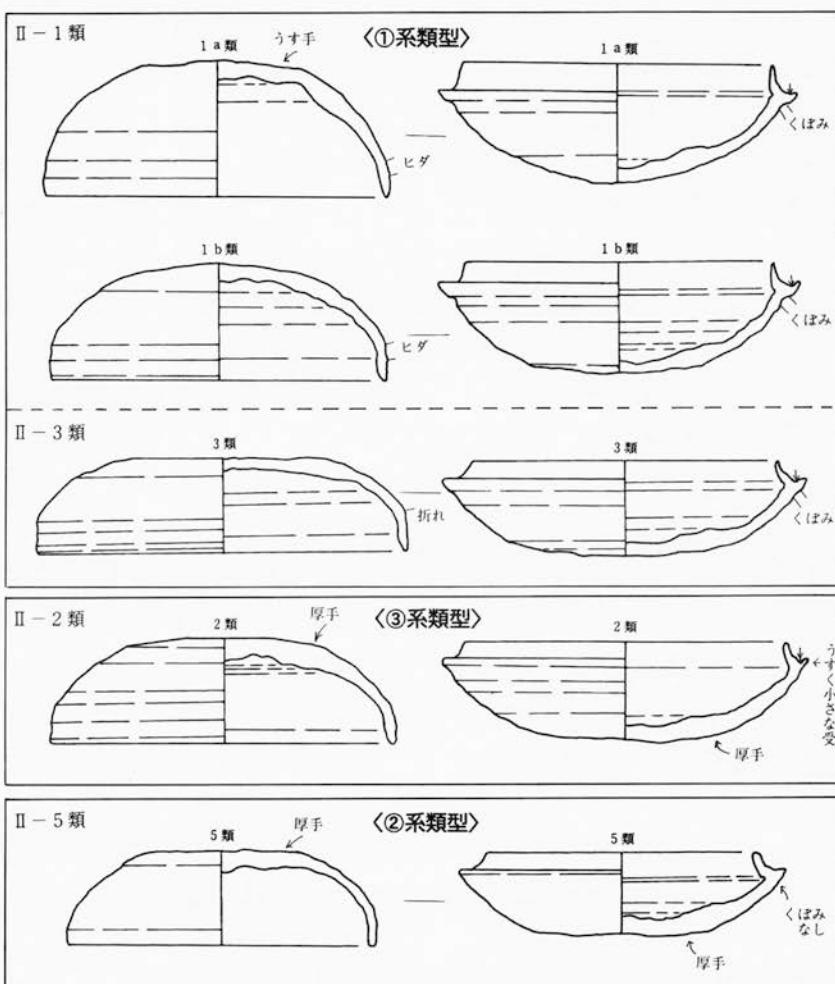
a. オオカミダニ支群の須恵器坏A類型の再整理

オオカミダニ支群は2基の須恵器窯が並列して築窯される支群で、出土する須恵器の特徴から、連続して営まれる窯と判断される。左が2号窯、右が1号窯で、2号窯灰層右裾の上に1号窯掘り抜き築窯の際の排土（前庭部前面テラスとして使用）が乗る重複関係から2号窯→1号窯の新旧関係が捉えられている。床面出土須恵器からもこれは肯定でき、2号窯廃絶後連続して1号窯築窯、操業されていたものと予想される（1993年に石川県埋蔵文化財保存協会によって報告されている）。

報告の中で、沢辺利明氏は製作工人単位の復元を前提とした須恵器坏Aの類型提示を試みている。坏蓋と坏身の重焼き遺存資料が豊富で、蓋身対応関係を前提とした類型提示がなされており、2号窯で6

類型+細分 2 類型に、1号窯で11類型+細分 2 類型に分類している。さらに、灰層の枚数や床枚数から1号窯の操業回数を2回、2号窯の操業回数を1回とし、これらの類型がほぼそのままの工人数を示すものとして、各窯とも携わる工人数を5~6人と想定されている。沢辺氏がオオカミダニ支群の須恵器坏Aで行った工人単位復元を前提とする類型設定は、作り癖を念頭に置いたものであり、本稿の類型設定の範とさせてもらったものだが、灰層枚数や床枚数をそのまま操業回数とすることには無理があり、これだけの灰層及び廃棄須恵器を排出するためにはかなりの回数の操業が行われたものと予想する。毎回の係わる工人数も一定ではなかったと予想しており、類型数をそのまま工人数に置き換えることは危険である。筆者の重点は、タカヤマ窯の須恵器蓋坏類型の設定の際に主体となる類型の抽出とそれが窯間で継続的に認められるかにあり、その視点で沢辺氏が行った類型設定と対比させ、類型のグルーピングに重点を置きながら、再整理を試みてみたい。

古く位置付けられる2号窯から述べると、蓋・身とも1類が圧倒的多数を占め、主体的類型として位置付けできる。床面一括の坏Aが全て1類で占められることとも対応関係にあり、代表する類型（工人単位）として位置付け可能と考える。この坏蓋には体部から口縁部へ丸く移行して端部の手前に2段のロクロヒダをもつことが特徴で、身では受け部手前に明瞭なくぼみをもって、上からの切り込みも伴いながら長めの受け部を作り出す点と口縁部が反り立ち気味になって端部薄くシャープな作りをする点が特徴として上げられる。また、蓋身ともに体部を丸く作り、切り離し面を狭くする成形方法がとられており、比較的薄く、作りが丁寧で、大ぶりを呈す。これら

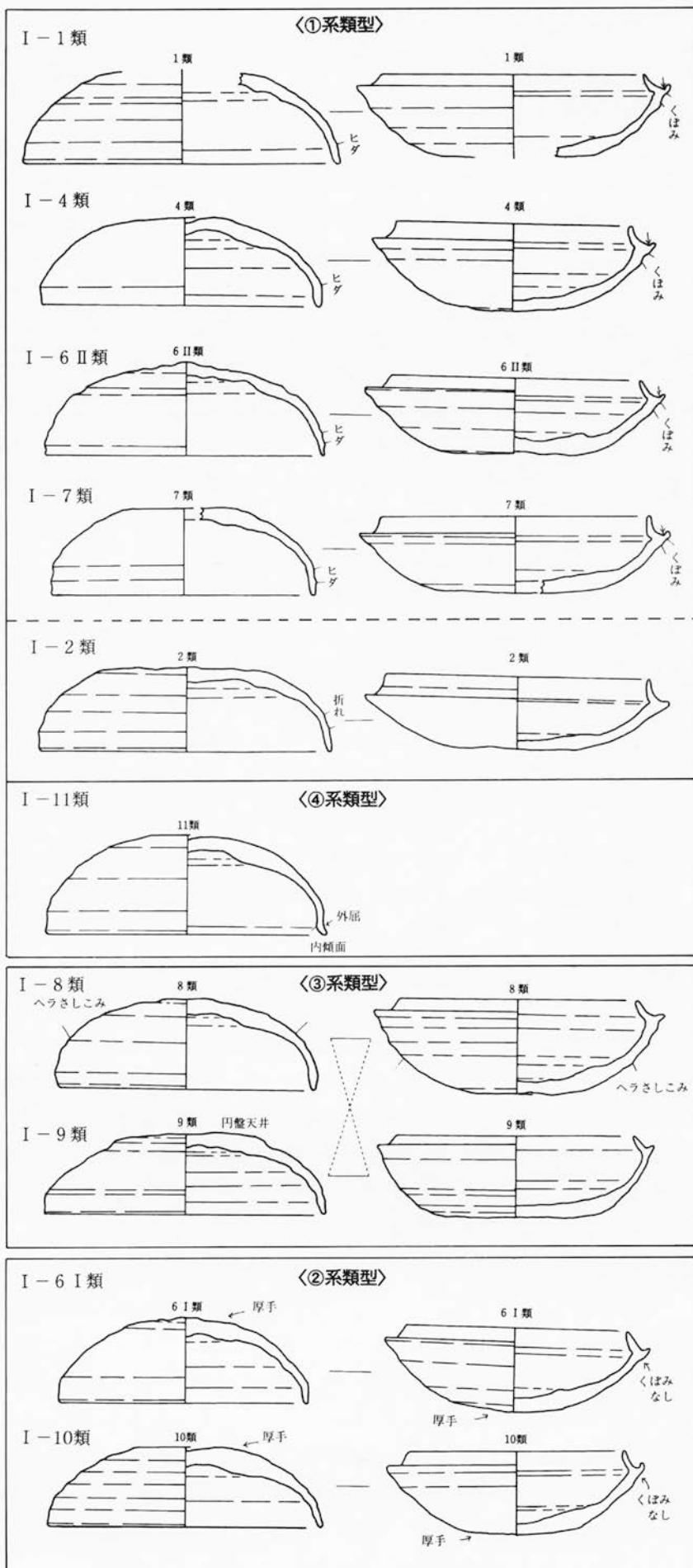


第133図 オオカミダニ2号窯須恵器坏A蓋・身類型分類 (1/3県保存協会1993を一部改変)

これらの特徴は1類以外の3・4類でも見られ、同類系統として位置付け可能と考える。3・4類は数量的に見ても少なく、1類の亜種形態と言えるものだろう。2号窯で主体を占める1類系統に対し、量は少ないが、他系統として位置付けられるものに2類と5類がある。5類は切り離し面の広く平坦なもので、全体的に作りが稚拙で、1類系よりも小型で厚手を呈す。身の受け部手前にくぼみなく、上からの切り込み伴わずに、口縁部短く内傾する特徴をもつ。2類も切り離し面広く、厚手底部をもつもので、受け部手前にくぼみなく口縁部立ち上がり短いなど5類に似た特徴も見られるが、全体的に作りは稚拙とは言えず、受け部上からの切り込み深いなどシャープな作りも見られ、5類とは異なる特徴をもつ。

なお、類型名について、1号窯との混在を防ぐため、2号窯の類型はII-〇類、1号窯の類型はI-〇類として区別する。

1号窯でも2号窯で主体を占めたII-1類系の特徴をもつものが主体的に確認されている。I-1類、I-2類蓋、I-4類、I-6 II類、I-7類がそうで、II-1類系よりも天井・底部が薄手で、ヘラ切りラセン痕が明瞭に残る違いはあるが、蓋口縁部の2段ロクロヒダや身受け部手前のくぼみ、口縁部立ち上がりの作りなど類似性高く、同系統と位置付けて妥当と考える。数量的にも2号窯の量比からさほど増減はなく、2号窯の主体的類型(工人単位)が1号窯でも主体を占める類型(工人単位)として存在したことが伺われる。ただ、厳密にはII-1類系のどの類型と1号窯のどの類型が対応するかは不明であり、工人個人の作り癖を照合するまでに至っていない。これらII-1類系に対し、厚手でやや小型の特徴を呈するI-6 II類・I-10類と、I-8・9類が定量存在する。別系統と位置付けられるものであり、それぞれII-5類とII-2類に対応関係をもつものと予想する。ただ、ここでもI-6 I類身及びI-10類身の受け部が上からの調整によってシャープとなっただ点やヘラ差し込みによって切り離し面を狭くする点、I-8・9類の受け部形態の違いなど2号窯のものと相違点



第134図 オオカミダニ1号窯須恵器壺A蓋・身類型分類
(1/3, 県保存協会1993を一部改変)

はあり、同類型には位置付けられない。ただ、細部での作り癖が類似するが多く、主体1類系に対する同類系統の類型として対応可能なものと考える。

以上、2号窯、1号窯のいずれにおいても、主体となる類型が有り、それが同系統として継続していることが理解された。仮にこの系統を①系とするが、①系は口縁部や受け部のシャープな作り、底部円盤状の痕跡を残さずに薄手に作るなど熟練した工人が製作したと感じる作りのよいもので、後者の少数派類型よりも大ぶりを呈することでも共通する。また、焼成も意識的に降灰する場所に窯詰めしたような焼き締まりの強いものが多い傾向をもち、少数派類型とは明瞭に異なる。少数派類型ではⅡ-5類系統が多く(②系とする)、①系に対する形で存在する。①系の熟練した薄手作りに対する稚拙ないしは粗雑な厚手小ぶり作り製品として対局にあり、円盤底部を明瞭に残す点でも特徴をもつ。また、火膨れするような胎土で暗青灰色を呈するものが②系には定量有り、他の焼きのものとは明瞭に識別でき、②系にしか確認されない焼き色である。オオカミダニ支群は対局的位置にある①系と②系でほぼ構成されると言えるが、両系統に属さない極少数を占める類型が存在する。どちらかと言えば、①系に近い作りをするもので、①系の亜種として考えることも可能では有るが、一応類型として分けて考え、Ⅱ-2類系統を③系、I-11類を④系と位置付ける。

b. オオカミダニ支群とタカヤマ3号窯の須恵器坏A類型比較

まず、ロクロ回転方向で比較すれば、オオカミダニ支群の上記の須恵器坏Aは確認されるもの全てが右回転であり、右回転に統一されるタカヤマ3号窯に共通する。タカヤマ3号窯の須恵器坏Aは、大きくア系とカ系に分けられ、ア系が7割、カ系が3割程度で構成される。この点で、オオカミダニ支群の①系と②系の数量に近い構成をもち、さらに、カ系が底部円盤痕跡を明瞭に残し、厚手小ぶりの稚拙ないしは粗雑作りの特徴をもつ点で②系と類似する。本文報告ではカ系のものをタカヤマ1号窯のロクロ右回転系統のものとの類似性で評価したが、オオカミダニ窯資料実見の印象としては②系との類似性がより高いと判断される。ア系は底部薄手でヘラ切りのラセン状痕跡の形状、身受け部手前のくぼみ、口縁部立ち上がりの形態など①系との類似性高く、降灰する焼き締まりの強いものが主体的である点でも共通点をもつ。タカヤマ3号窯の稚拙小ぶりのカ系に対する精巧大ぶりのア系として存在する点で両者は対局的位置にあり、オオカミダニ支群の製作単位がそのままタカヤマ3号窯の須恵器製作に携わったかのような印象を受ける。ただ、ア系としてひと括りした中にもオオカミダニ支群で④系とした口縁部段をもち端部内傾面をもつか僅かに外屈する蓋ア類やオオカミダニ②系でしか確認されなかった暗青灰色発色の特徴的焼きで全体の中で小ぶり厚手を呈す一群があり、時間的経過の中での形態変化に伴って類型設定項目が錯綜している部分もある。オオカミダニ窯資料を実見してから、再度タカヤマ3号窯を見れば、同類型に分類していたものでも細分できるものもあり、全ての類型の対応関係を抽出できる訳ではないが、かなりの率で対応関係が追えるものと予想される。タカヤマ3号窯で新たに出現する工人単位を主張するような類型は確認できず、オオカミダニ支群の系統がほぼ全て確認されることから考えて、坏A器種に限られるが、製作工人は、オオカミダニ支群とタカヤマ3号窯で共通する構成をもっていたと予想する。つまり、この3基の窯の須恵器工人構成はほぼ同一であり、須恵器坏Aの口径や身の立ち上がり、全体的な作り等、オオカミダニ1号窯からタカヤマ3号窯の前後関係で考えられることから、オオカミダニ2号窯→オオカミダニ1号窯→タカヤマ3号窯の順で位置付け、これらを林窯群Bグループと仮称しておきたい。

c. 須恵器坏A類型から見た林窯群Bグループの工人構成

林窯群Bグループの須恵器坏Aは、3基いずれの窯でも、4系統に大別され、それらが継続性もって構成される状況を確認したが、3基とも①系が数量的に7割前後を占め、4系統の中で中心的存在とし

て位置付けできる。①系の中で数類型に分かれ、その中で個性的に類型を主張したものが④系のような在り方を示すが、極めて同族的様相をもつと感じられる。①系は技術的に高く、窯詰めにおいて主導的位置（良質焼成の場）を保つことから考えて、オオカミダニ支群の主導的役割を担う工人が属するグループと言える。これに対し、少数派工人として②系と③系があるが、①系に対して小型で、粗雑ないしは稚拙な特徴ある作りをし、技術的に未熟な感を受ける。が、一方では①系を意識した異なる形態を作出している可能性もある。工人組織を異にするようなヘラ記号による識別行為は全くなされておらず（異質の工人单位が同一窯で窯詰めする際にヘラ記号で製品を識別する行為が行われている、望月1991）、基本的には①系と同組織内に位置付けられるものと考えるが、窯詰めの際の①系に対する従属的位置付け（不良焼成の場）がなされるもので、①系に対して服属的立場にあるグループと言えようか。工人によって製作器種が片寄ることは十分にあるため、単純に坏A類型の数量比が工人数を示したとは限らず、①系工人が坏A製作に主体をおいていた可能性を想定しておく必要がある。ただ、①系工人が複数であった可能性は高く、②系と③系が共存するとすれば、4人以上の工人が参画する窯場であったと考えられる。

(2) 六字ヶ丘支群の須恵器坏A類型とタカヤマ支群

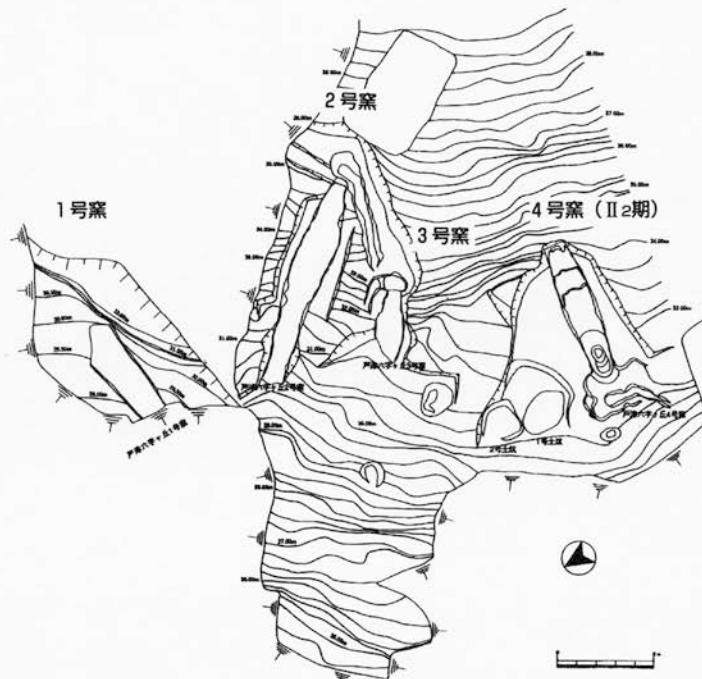
a. 六字ヶ丘支群の窯跡分布と灰原

六字ヶ丘支群は陶邑編年TK10型式に併行する須恵器窯が1基確認される以外は、全て7世紀代に位置付けられる。7世紀代の窯はI1期が3基、II2期が2基、II3期が1基の計6基で構成され、南西側に位置するII2期とII3期の2基の窯を除く、4基が発掘調査されている。当調査報告も市教委によって1993年に既に刊行されているが、I1期に位置付けられる3基の窯のうち、1号窯と2・3号窯の調査に4年間のブランクがあったこともあり、その時点では1号窯と2・3号窯との新旧関係が捉えられておらず、灰原内遺物の帰属も行われていない。林窯群の工人編成や窯編年において、六字ヶ丘支群の資料は欠かすことのできないものであり、ここに当須恵器資料の再整理を行うとともに、窯の前後関係と灰原遺物の帰属を提示してみたい。

なお、当資料の再整理にあたっては、担当者である宮下幸夫氏の承諾を得、随所でご指導いただいた。感謝申し上げる。

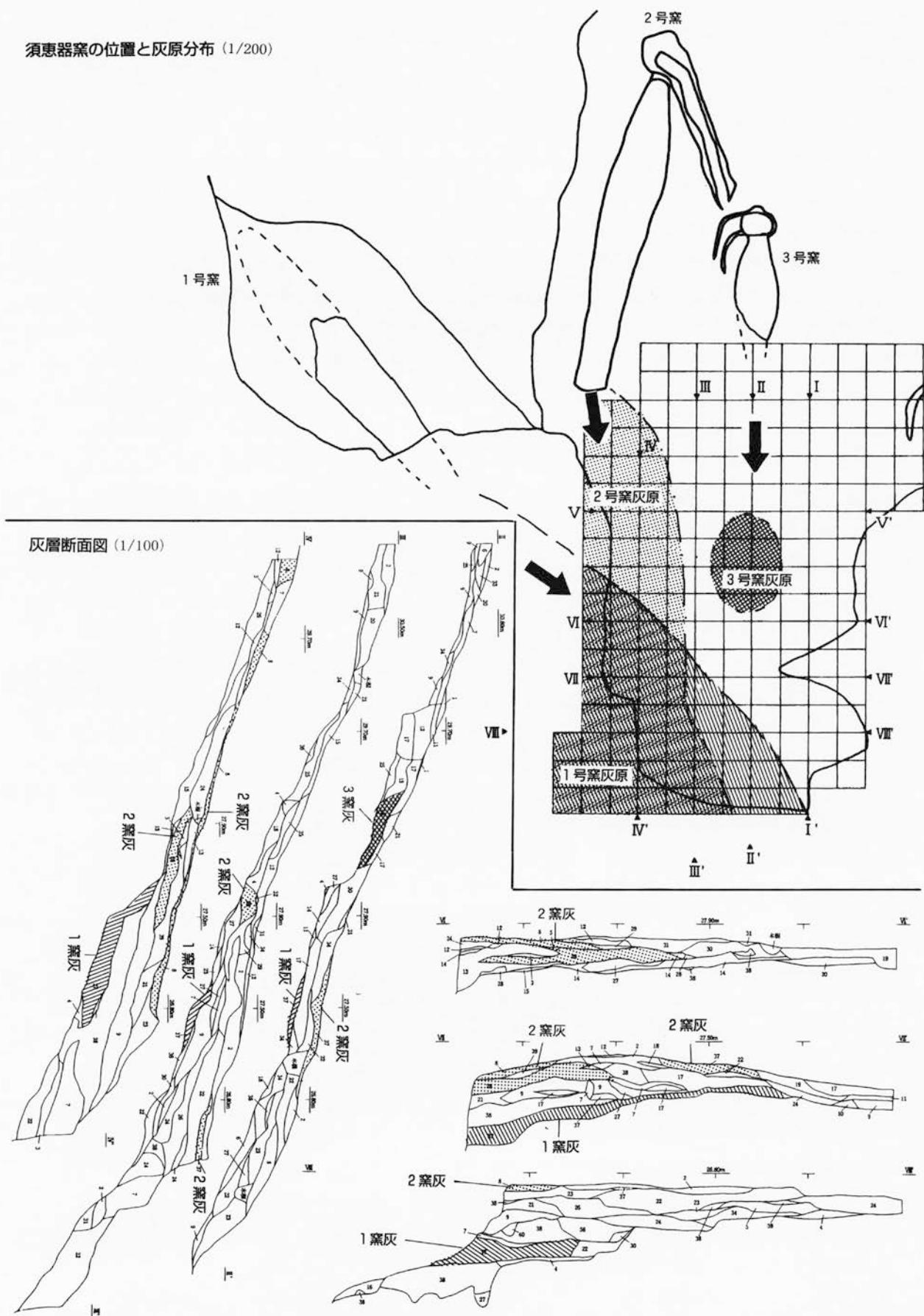
b. 須恵器窯の位置と窯の前後関係

1号窯の主軸方位と地形コンタから2・3号窯との位置関係を出して貼り付けたものが右の図である。3基の窯のうち斜面に直交して窯が築かれるのは3号窯のみで、2号窯は奥に向かってやや右斜めに、1号窯は左斜めに築窯されている。1号窯の破壊が著しく、焚口や排煙口の位置が定かではないが、残存する窯体の形態から考えて、1号窯の焚口は2号窯の焚口の下方に位置すること



第135図 六字ヶ丘支群全体図 (1/400) (小松市1993一部改変)

須恵器窯の位置と灰原分布 (1/200)



第136図 六字ヶ丘支群の窯の位置と灰層の重複関係 (小松市1993を一部改変)

は間違いない。往々にして、同一斜面での連続的な築窯の場合に、斜面下方から上方へという傾向が強いことから考えて、2号窯が3基の中では最新である可能性が高い。それを示すように、2号窯から伸びる灰層は表層で広がるものに繋がっており、灰原下層方向へとは繋がらない（2号窯床資料が最上層の灰層と接合関係をもち、下層のものとは接合しない）。また、1号窯の位置関係から考えて、その灰層は2号窯のかなり下方で検出されると予想できるが、それを示すような灰層が階段状に深くなつた部分から検出され、その上に厚い間層を挟んで2号窯より続く灰層が広がる。1号窯灰層は厚く、深く掘り込まれた中で確認されるのは、1号窯が1度の改窯を含め、計4枚の床をもっていたためで、灰原の広がる方向は窯体主軸方向と一致している。以上より、1号窯→2号窯の新旧関係が追え、また、2号窯と3号窯については、2号窯燃焼部床下から3号窯灰層と思しき層が検出されたことより、3号窯→2号窯の新旧関係をもつと判断される。なお、1号窯と3号窯の新旧関係については、それを示す層の重複はないが、3基の中で最も古く位置付けられる須恵器坏Aが3号窯床で出土することから考えて、3号窯→1号窯→2号窯の順で築窯されたものと判断する。

c. 六字ヶ丘支群の須恵器坏A類型の再整理

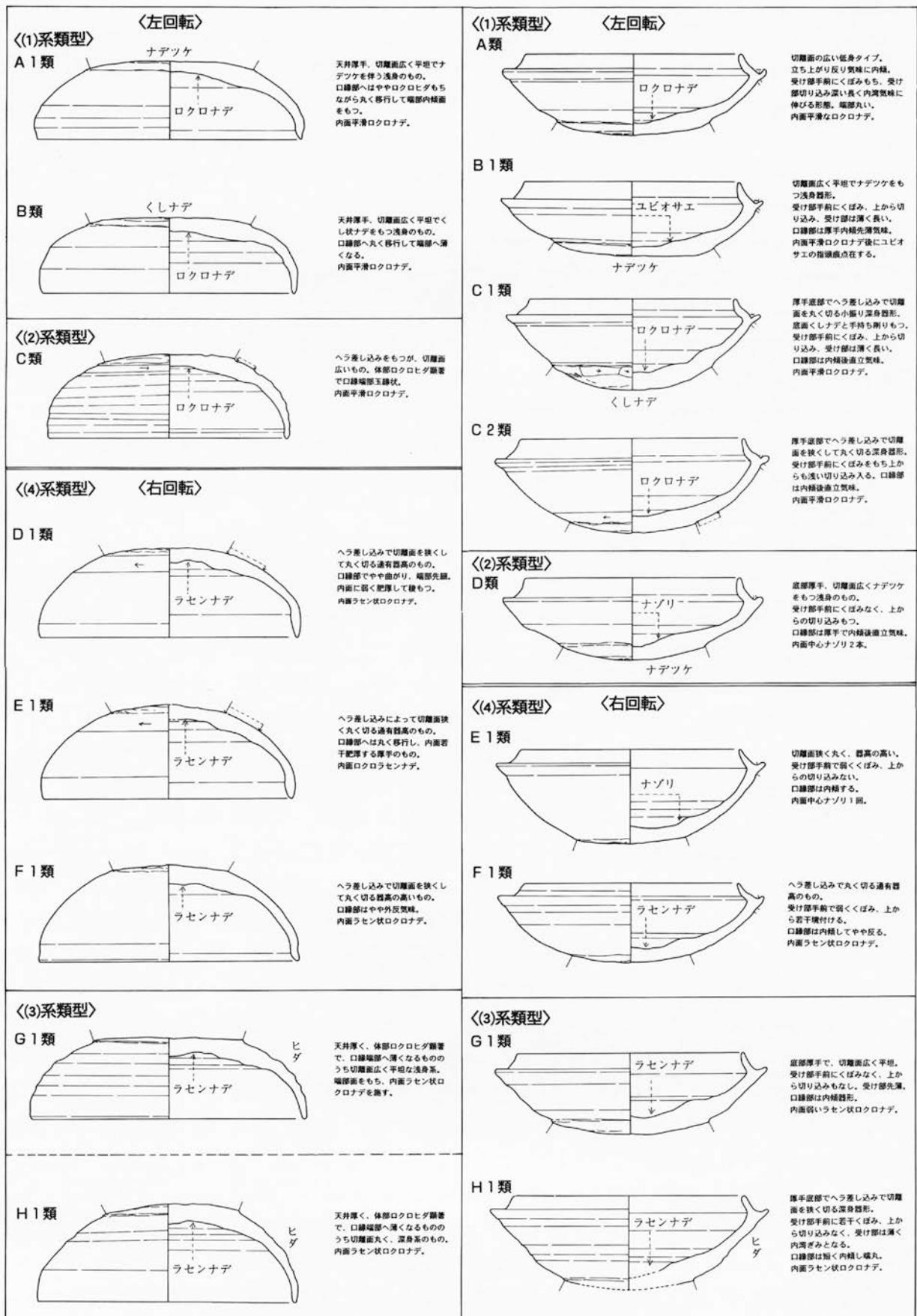
3号窯出土須恵器は極めて少ないため、ここでは除外し、1・2号窯の須恵器坏Aについて、灰原出土資料の帰属も含めて、類型提示とその概要を述べる。

《1号窯出土須恵器坏A》

1号窯はI次窯とII次窯に分けて提示する。

I次窯は坏A蓋でA～Hの8類に、身でA～Hの8類に分類している。口クロ回転は左右いずれもあり、蓋のA～C類と身のA～D類が左回転、蓋のD～H類と身のE～H類が右回転となる。数量的には右回転が主体で、類型数の多さと対応する。左回転の蓋では、A・B類が口縁部器形で差異あるものの、同系と位置付けでき、C類が極めて少数の類型であることから、ほぼA類系で占められる。身では底部が丸くやや深身となるものと底部平坦でやや浅身となるものの違いはあるが、受け部や口縁部立ち上がり器形はA・B・C類とも類似性高く、同系と位置付けでき、蓋A・B類に対応するものと予想する。身D類は受け部作風や底部形態で異なり、少数派の類型として存在する。以上、左回転は蓋A・B類と身A～C類を同系((1)系)として位置付け、他は少数派類型((2)系)とする。(1)系は内面平滑口クロナデを基本とし、切り離し面をナデツケやくし状工具ナデが施される。右回転は内面調整でラセン状の強い口クロナデが施され、切り離し面調整は目立たない。蓋D・E・F類はヘラ差し込みで切り離し面を狭くする天井丸みもつ器形を特徴とし、口縁部内面肥厚したり、外屈する形態をもつ点で同系と位置付けられる。これに対し、G・H類は天井厚手の体部口クロヒダをもつ一群で、口縁端部へと薄くなる特徴をもつ。蓋G・H類に対応する身はG・H類で、顕著な口クロヒダと底部厚く作る点で共通性がある。立ち上がり短く、受け部手前にくぼみなく、上からの切り込みも伴わない点が特徴と言える。これらの蓋身一群を(3)系とし、厚手でやや稚拙を感じる作りを特徴として上げる。これに対し、受け部を上と手前からくぼみをつけて作り出す身E・F類は口縁部先薄で長く内傾する特徴をもち、底部の厚さもG・H類より薄く、(3)系に比べて精緻な作りをする。底部切り離し面を狭くすることと作りがよい点で蓋D～F類に対応すると予想され、これらの一群を(4)系として位置付ける。右回転の一群は、左回転に比べて多い傾向があり、(3)系と(4)系とが均衡する形で存在する。

II次窯もI次窯同様の類型をもち、大きな変化はないが、I次窯で半数近くの量比を占めていた左回転が減少し、右回転が過半数を占めるようになる。特に蓋では左はA類1類型であり、右が9割以上の高い率を占める。左回転では(1)系がやや口径を縮小した程度で、ほぼ同形態で存続し、内面平滑口クロナデも継続的に施される。これに対し、右回転は(3)系の蓋が口クロヒダ弱くなり、身も底部厚さ減じる。



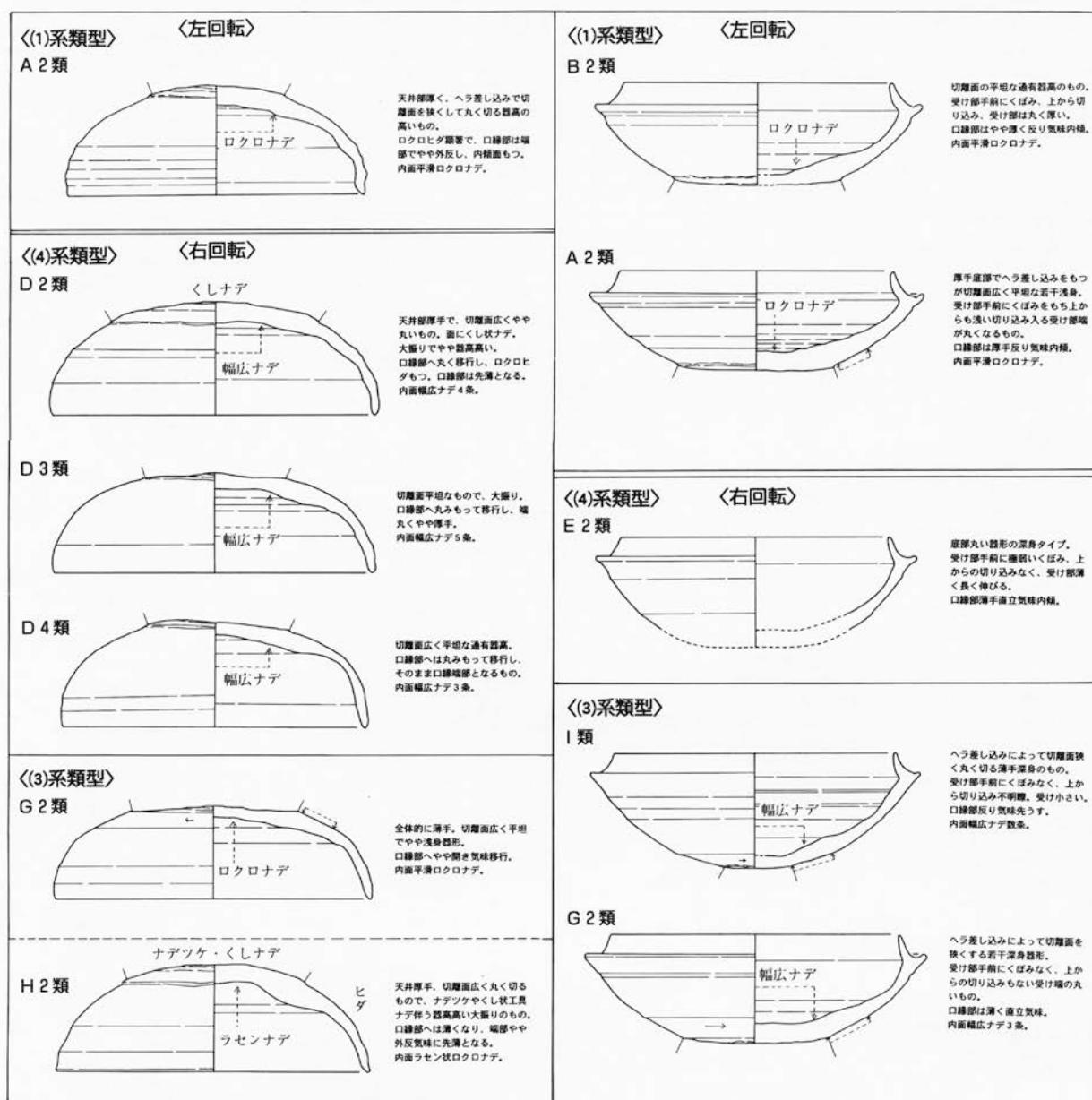
第137図 六字ヶ丘1号窯I次窯須恵器坏A蓋・身類型図 (1/3)

(4)系の蓋は天井薄く全体的に偏平となり、内面肥厚は形骸化する。また、右回転すべてに言えることだが、I次窯では内面ラセンナデ主体であったものが、II次窯では幅広ナデを範囲広く施すものが主体となつておる、調整の変化が看取される。

《2号窯出土須恵器坏A》

2号窯は2枚床が確認されており、上下の床で様相違があるため、ここでは分けて提示する。

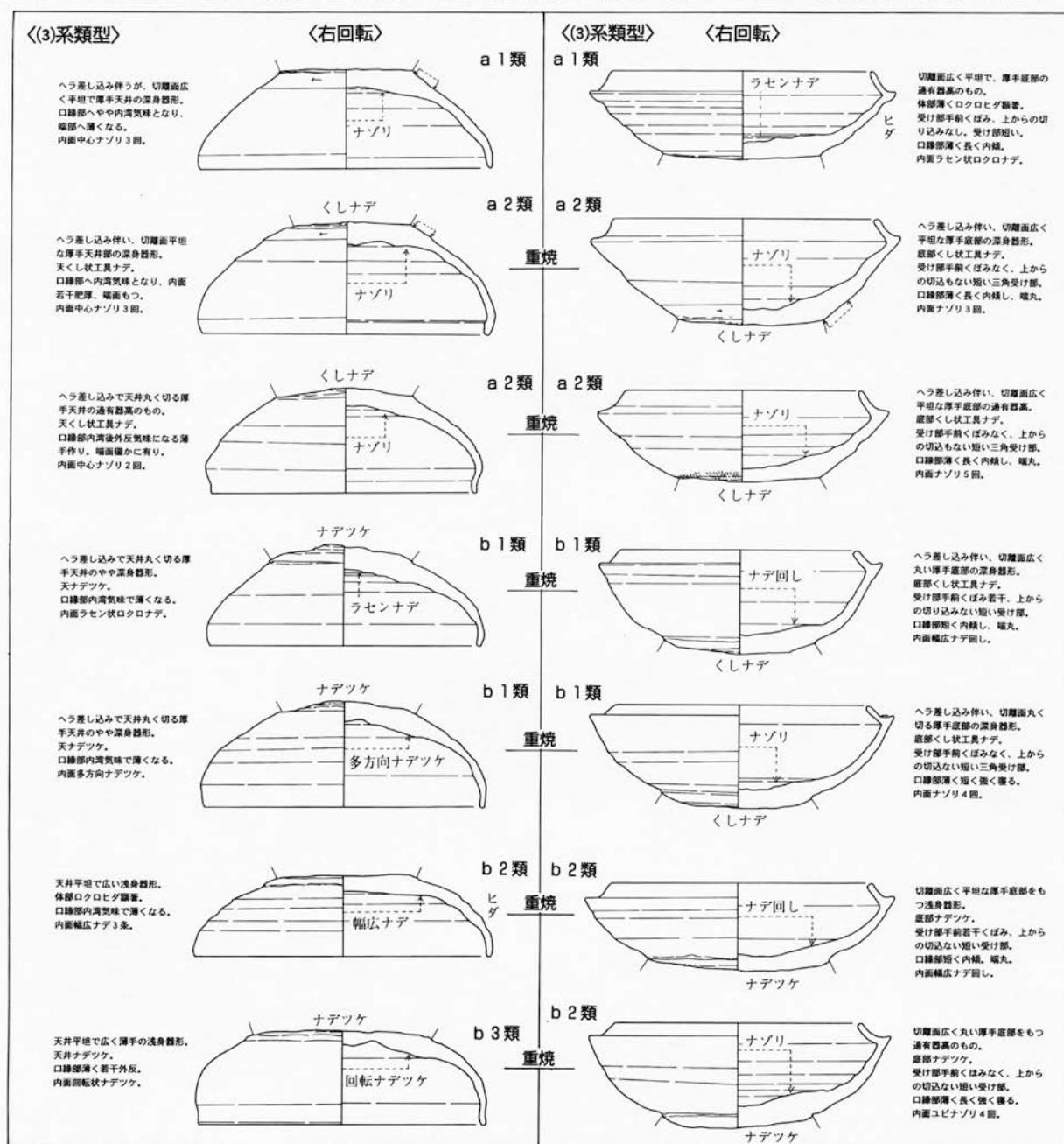
1次床には床面に意識的に取り残したような坏A蓋・身セットの重焼き資料が6個体遺存しており、まとまつた坏Aが得られている。全てロクロ右回転であり、左回転は確認されていない。蓋で2類5細分、身で2類4細分できる。蓋a類は、厚手天井でヘラ差し込みによって切り面を狭くする。体部は開き、口縁部で薄く内湾することを基本とする。内面ナゾリ、天井くしナデを基本とする。対応する身a類も同様の調整が基本で、底部は同様。受け部を上下から押さえるような作りはせず、三角形状に屈曲しただけとなっていることが特徴である。これに対し、蓋b類は天井厚手主体であるものの、a類よりも広く切るものが多く、若干円盤状に突出するものもある。体部は丸みもって移行し、口縁部極薄となる。内面ナデツケやナデ回し、天井ナデツケが目立つ。また、2類として分けたが、偏平器形のものが



第138図 六字ヶ丘1号窯II次窯須恵器坏A蓋・身類型図 (1/3)

定量あり、これもこの類型の特徴の一つと言える。対応する身はいずれも円盤状に突出する底部をもち、厚手で、底部広く切る。受け部はa類同様、上下からの押さえが弱く、微弱で、口縁部極めて薄く強く寝る特徴をもつ。以上の類型は、底部厚く深身器形を呈し、類似法量をもつ点で極めて類似する形態と言えるが、切り離し方法や細部での作りの違いは明瞭で、同一工人によるものとは言えず、はっきりと複数の手による製品と位置付けできる。ただ、系統的には類似点があり、同系として位置付け可能である。なお、1号窯の類型対比では、底部厚手円盤状を呈する点、ロクロヒダをもつ製品が定量存在する点、蓋口縁部の薄さ、身受け部形態などから考えて、(3)系との共通点があり、これと同系として位置付けておきたい。

2次床でロクロ回転を確認できるもののうち1点のみ左回転があるが、これは例外的であり、右回転に統一されると考えて妥当である。1次床の(3)系の流れを汲むと予想されるa類、b類が確認される。底部円盤状の作りやロクロヒダ、切り離し面ナデツケ・くしナデ調整など継続する要素が多いが、1次床よりも低平となり、底部厚くならないものが主体的となる。また、1次床では確認されなかった平坦

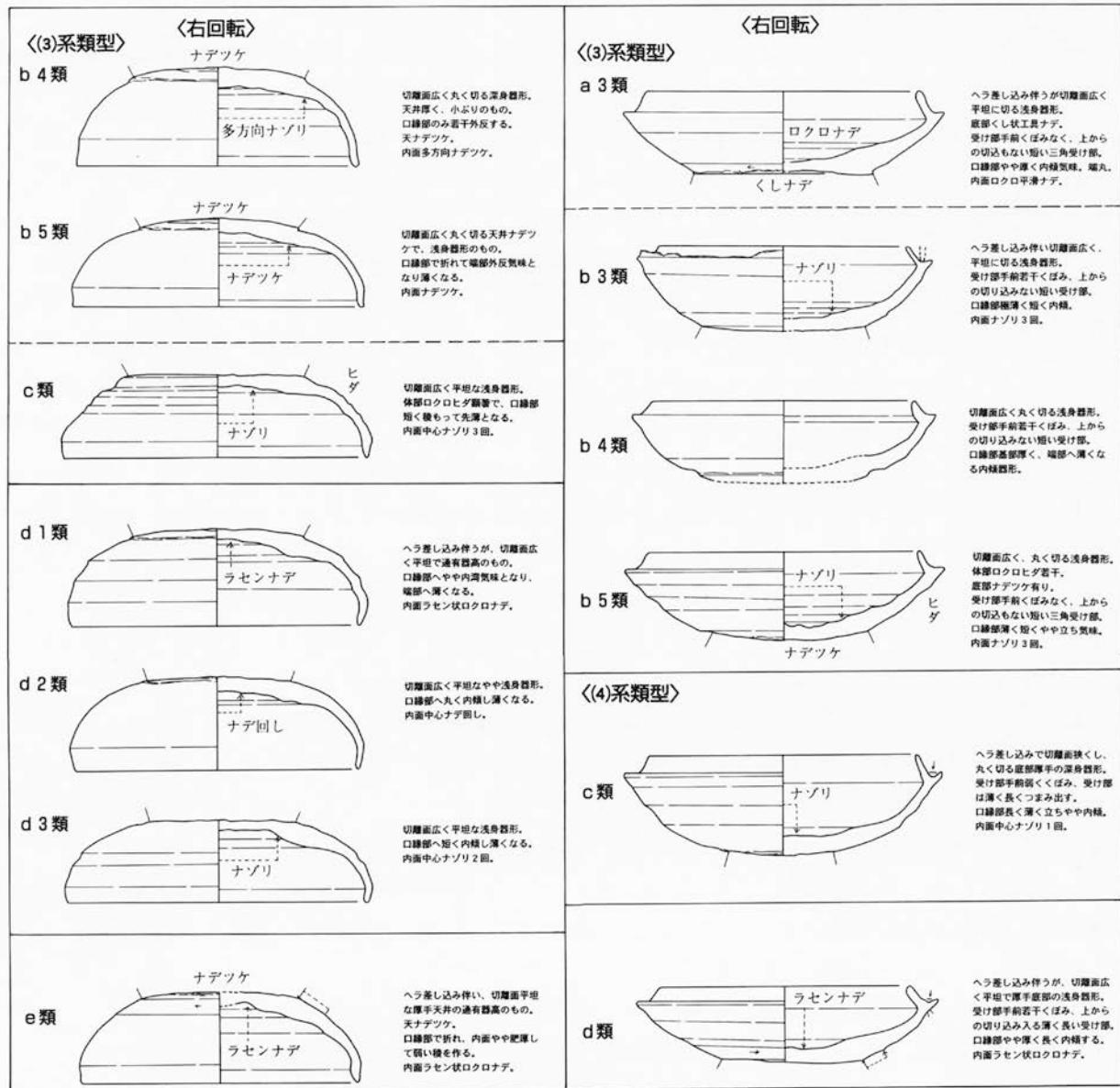


第139図 六字ヶ丘2号窯1次床須恵器壺A蓋・身類型図 (1/3)

で広い天井をもち、ロクロヒダ顯著なc類は1号窯のG類に共通する形態を有するものであり、これについても(3)系とした。c類の他に、1次床では確認できなかったが、1号窯から継続する類型と予想されるものに、蓋d類、e類、身c類、d類がある。蓋d類・e類はかなり小型化し薄手となっているが、1号窯の蓋D類・G類にそれぞれ対応するものと予想しており、これに内面ラセンナデが目立つこととも呼応する。身c類・d類も蓋同様、小型化しているが、1号窯身G類・F類に対応するものと予想する。以上、1号窯蓋D・G類、身G・F類が(4)系に属することから、当窯のものも(4)系と判断され、上記の(3)系と合わせ、2系統の坏Aで構成されることとなる。両系統の坏Aは(3)系が多くを占めるようであるが、(4)系も定量確認しており、その数量は均衡していたものと予想する。つまり、1次床のような(3)系に統一される状況はその出土状況に類型統一の要因があるもので、2次床の構成が通常の在り方であったと考える。

d. 六字ヶ丘支群とタカヤマ1・2号窯の須恵器坏A類型比較

これまで、六字ヶ丘支群の須恵器坏A類型を系統分けし、窯間での継続性を見てきたが、注目されたのは、1号窯で定量確認された左回転のものが2号窯では姿を消す状況である。1号窯II次窯で既に左



第140図 六字ヶ丘2号窯2次床須恵器坏A蓋・身類型図 (1/3)

回転減少傾向は現れており、2号窯に移動する際、貫徹される。これは、タカヤマ1号窯から2号窯への移動の際にも見られる現象であり、タカヤマ窯では逆に左回転が増加して行って、2号窯で左回転に貫徹される。これはあたかも、両支群1号窯で右と左が併存していたものが、両支群2号窯でロクロ回転によって整理され、窯を分けられたかのような在り方を示しており、それを念頭に置いて、両支群の類型整理と対比を行ってみる。

まず、左回転の類型であるが、タカヤマ1号窯で過半数を占めるA系は、2号窯ではA系と同系と言えるa系に統一される。ただ、2号窯のa系は蓋で3類型、身で5類型に分類でき、系統的に同族と位置付けできるが、所属する工人は多かったであろうことが予測される。1号窯でB系としたものは2号窯では確認できず、極少数派の製品と言えるだろう。両窯で主体を占めるA・a系は六字ヶ丘支群の(1)系に相当し、同系と位置付けできる。また、(2)系とした蓋とタカヤマB系とは別のものであり、特に統合せず、少数派類型としておきたい。

次に、右回転の類型であるが、タカヤマ2号窯でも蓋d・e類と身f類が確認されるが、5%以下であり、2号窯では基本的に左回転に統一されていると言ってよい。六字ヶ丘2号窯で左回転が確認される状況と同様のものであったと予想する。タカヤマ1号窯では右回転は4~5割を占め、そのうちE系が35%程度を占める。E系はロクロヒダや口縁部薄く作る点、厚手円盤状底部作り、身受け部形態から六字ヶ丘支群(3)系に対応するものと考えられ、タカヤマ窯で従属的位置にあるG系は六字ヶ丘支群の(4)系に対比可能と言える。タカヤマ1号窯では(3)系と(4)系とが3対1の割合で存在する。六字ヶ丘1号窯でははっきりした数値を出していないが、(4)系主体で構成されることは間違いない、ここにおいても両窯で逆転現象が起こっている。そして、右回転に統一される六字ヶ丘2号窯で、1次床が(3)系に統一されるように、確実に(3)系が増加しており、2次床の状況から予測しても、両系統が均衡する立場にあつたことが予想される。

六字ヶ丘支群及びタカヤマ1・2号窯の坏A系統を見ると、左の(1)系、右の(3)系、(4)系の3系統では構成され、それが窯ごとに増減する様相が見られたが、六字ヶ丘支群での1号窯から2号窯への新旧関係とタカヤマ支群での1号窯から2号窯への新旧関係を対峙させ、六字ヶ丘2号窯とタカヤマ2号窯の左右一方のロクロ回転に統一される段階を同時期と考えれば、六字ヶ丘1号窯とタカヤマ1号窯の新旧関係が問題となる。両窯は、坏A形態や内面調整、法量等から同時期である可能性が高く、また、類型の偏りと回転方向の増減、そして同斜面に築かれる両2号窯のロクロ回転方向へ徐々に主体を移す様相から考えても、同時期操業は自然と言える。そして、両1号窯の改窯や床枚数の多さもそれを示唆するものと言えよう。ただ、タカヤマ1号窯においては、後述するが、古手の坏BがI次窯で焼かれていることから考えて、タカヤマI次窯が先行して築かれ、II次窯以降から六字ヶ丘1号窯と同時操業された状況を想定したい。六字ヶ丘支群の中で最も古く位置付けられる3号窯とタカヤマ1号窯I次窯とを対比することは資料不足でかなわないが、林窯群での須恵器生産が六字ヶ丘3号窯より始まるとは考え難く、同時期に開窯されたものと考えたい。つまり、両支群に存在する5基の窯の須恵器坏類型の系統は窯によって偏在するものの、基本的には主体となる3系統を共有する窯であり、同一の組織内か管理下に置かれていたものと言える。まとめれば、六字ヶ丘3号窯・タカヤマ1号窯I次窯→六字ヶ丘1号窯・タカヤマ1号窯II次窯→六字ヶ丘2号窯・タカヤマ2号窯の順で展開していたものであり、これらを林窯群Aグループと仮称しておきたい。

e. 須恵器坏A類型から見た林窯群Aグループの工人構成

前述したように、林窯群Aグループの須恵器坏Aから求められる類型は、ロクロ左回転では(1)系と(2)系、右回転では(3)系と(4)系があり、左回転は(1)系が8割以上の過半数を占め、右回転は窯によって若

干の差はあるものの、ほぼ均衡した割合で存在することが確認できた。(3)系と(4)系は(4)系が比較的薄手で左回転の(1)系に類するような器形を有し、身受け部等の作りもよい熟練した作風を感じるのに対し、(3)系は厚手で身受け部の作りが稚拙で、ロクロヒダを顕著に残すなど粗雑ないしは未熟な作風をもつ。(4)系に比べて、口径が若干小ぶりとなるのも、稚拙なタイプには共通して見られる現象で、林窯群Bグループの(1)系に対する(2)系のような在り方をもっている。

4つの系統はこの中で各類型に分類され、複数の工人が所属する工人集団を示しているものと予想するが、ただ、(2)系に関しては極少量であり、主体的な工人集団とは別の関わりをもって、坏A製作に携わっていたのであろう。林窯群Bグループの(3)系や(4)系の在り方と同様のものと言える。主要な工人集団は左の(1)系と右の(3)系、(4)系であり、3つの工人集団を組み合わせながら、2カ所で窯を操業していたものと言える。ロクロ右回転の(3)系と(4)系は、林窯群Bグループ(1)系、(2)系の関係に近く、同一組織内に包括され、一つの窯を共有する在り方は通常見られることであると考えるのだが、全く異質の技術ないしは道具を使用する工人集団を同じ工人組織内で管理することは稀であるように思う。林窯群Bグループが右回転で統一されていたように、左回転ロクロが半数を占める状況は、当期としては異例のことであり（陶邑窯TK208型式では左回転主体であった状況から徐々に右回転主体へと転換し、TK209型式では右回転にはほぼ統一されるとし、それは全国的な規模での技術転換であると考えられている。田辺1981）、製品としては類似したものを作り上げていたとしても全く異質の技術を擁した工人集団である可能性もある。この点については、工人組織の問題も含め、まとめて詳しく述べる。

3. 須恵器坏A以外の器種に現れる林窯群AグループとBグループの相違点

これまで坏A類型からオオカミダニ支群及び六字ヶ丘支群とタカヤマ支群の共通性及び相違点を整理したが、六字ヶ丘支群とタカヤマ1・2号窯とが、そして、オオカミダニ支群とタカヤマ3号窯とが、それぞれ継続する系統の類型を保持し、谷を基点とする支群は別れるが同一の窯場と言えるような共通する特性をもつことが理解された。そして、前者の窯場を林窯群Aグループ、後者の窯場を林窯群Bグループと呼称して、大別した。ここでは坏A類型で見られた系統復元を補足、検証する意味で、以下にAグループとBグループの対比というレベルではあるが、六字ヶ丘支群とタカヤマ1・2号窯及びオオカミダニ支群とタカヤマ3号窯との共通項をもつ器種を提示し、その内容を簡単に記しておく。

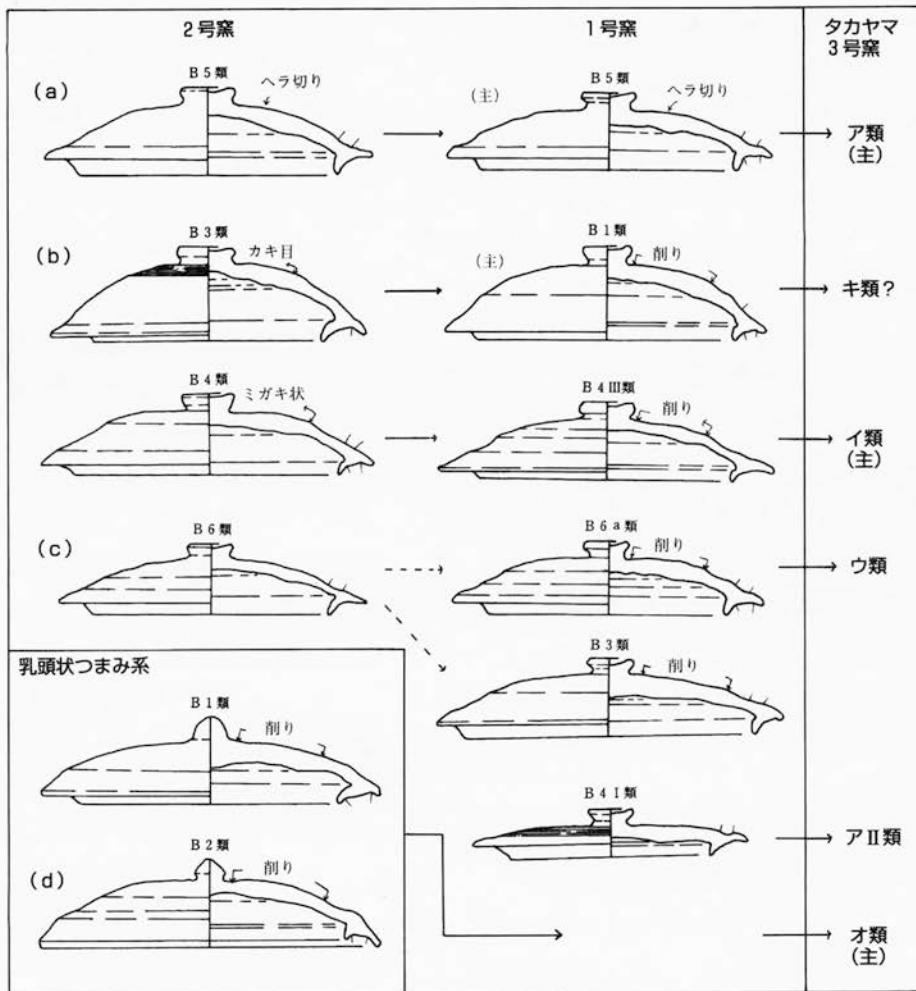
(1) 坏Bの類型提示と相違点

a. オオカミダニ支群の坏Bとタカヤマ3号窯の坏B

オオカミダニ1・2号窯いずれにおいても出土しており、2号窯から1号窯へ増加傾向にある。類型の捉えやすい蓋についてのみ述べると、いずれもロクロ右回転のもので、それはタカヤマ3号窯でも同様の状況である。第141図に示したとおり、オオカミダニ2号窯→1号窯→タカヤマ3号窯と継続する可能性が高い類型がある。仮にそれらを(a)~(b)とすれば、(a)は天井ヘラ切りのまま、口縁部手前に強いくぼみ、大型低平な偏平つまみを基調、(b)は天井削り、口縁部手前のくぼみなく深身を基調、(c)は天井境に稜線をもち、ミガキ状のナデか削り、天井薄手、小型偏平つまみを基調、(d)は天井削り、返り内側に微弱化、乳頭状つまみを基調とする。これらのうち、いずれの窯でも主体となる形態は(a)であり、特にオオカミダニ1号窯以降は過半数を占める。(b)(c)は3基を通じて主体的な形態とはならず、オオカミダニ支群からタカヤマ支群へ移行する時点で(b)から(c)へ主体的立場が移動する。タカヤマ3号窯ではつまみがより小型化し、返りが微弱化する特徴をもつ。(d)はタカヤマ3号窯では定量を占める形態となるが、オオカミダニ1号窯で乳頭状つまみはほとんど確認できず、2号窯で出土するのみである。2号窯

の当形態は返りが口縁部内側に入る微弱なものであり、口径も大きく、古手の形態をもつ乳頭状つまみの蓋とは異なる。出土点も1号窯灰との接点だったり、2号窯焚口の上層や窯体埋没土上層だったりと1号窯に帰属する可能性もあるのではないかと考える。形態としてはタカヤマ3号窯へ続くものであり、出土量が比較的多いこともそれを示唆する。

以上述べた(a)～(d)は坏Aの類型に匹敵するものと言えるが、工人集団を示すような系統としてグルーピングすることは難しい。形態として異なる(d)は偏平つまみとは根本的にモデルが異なっている

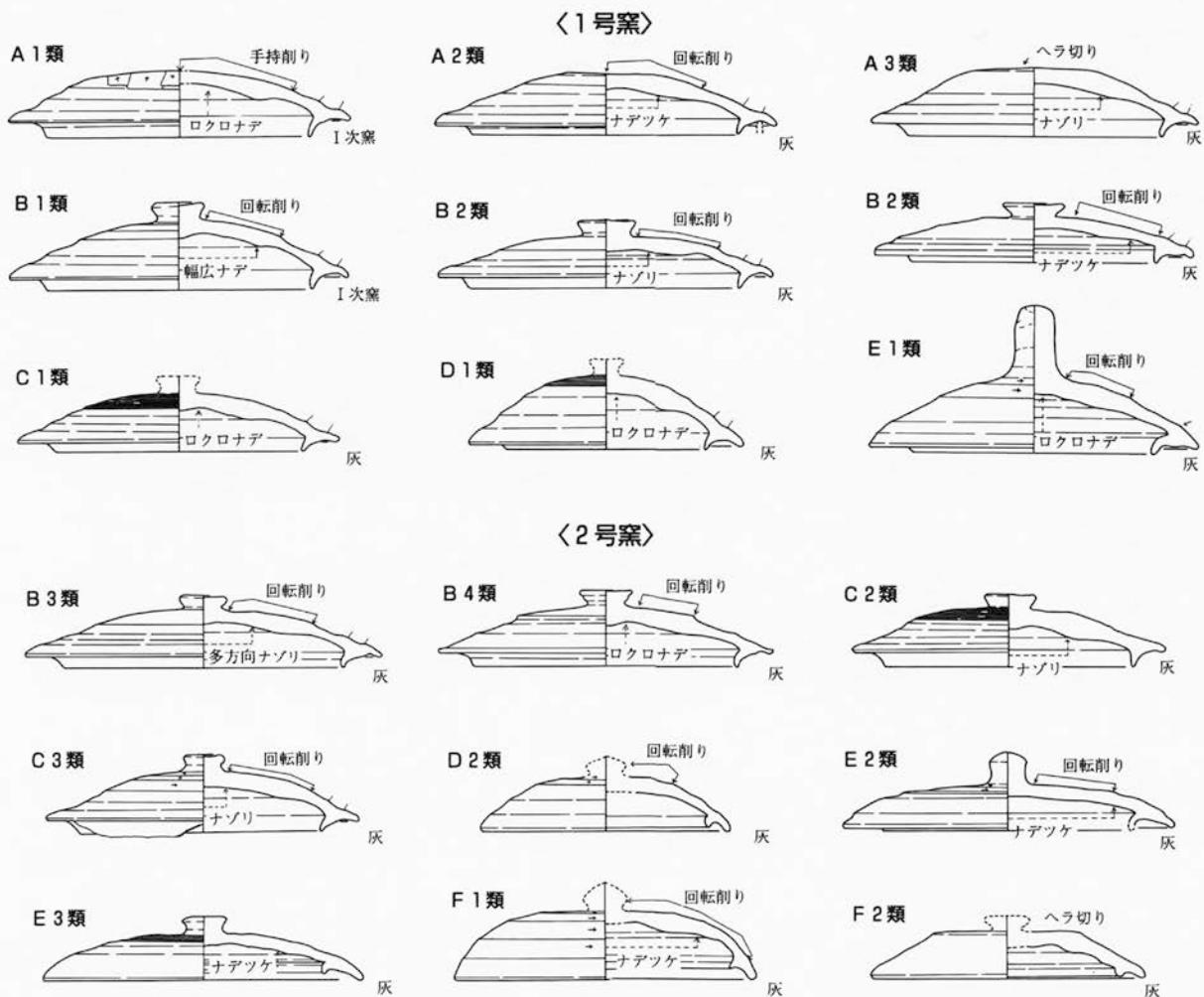


第141図 オオカミダニ支群の須恵器坏B蓋類型図（1/3）（県保存協会より転載）

るもので、作り癖とは言えないものであり、あえて示せば、(b)の口縁部形態や天井器形、タカヤマ3号窯で見せた特異な内面調整などが系統の違いと言えるものかもしれない。ただ、坏Aで見られた稚拙と性格づけられる系統のものは存在せず、全て熟練系の工人により、製作された可能性が高いのではないかと考える。

b. 六字ヶ丘支群の坏Bとタカヤマ1・2号窯の坏B

六字ヶ丘3号窯に伴う資料は未確認であるが、六字ヶ丘1号窯I次窯床より出土しており、六字ヶ丘1・2号窯では坏Bの定量生産が確認されている。ロクロ回転は身B1類の1点のみ左回転であるが、他は全て右回転であり、坏Aの左回転占有率よりも低い率で存在する。坏Aが左回転主体ないしは貫徹されるタカヤマ1号窯II次窯、2号窯では、同時期に位置付けられる六字ヶ丘1・2号窯に比べて坏B占有率が明らかに低く、ロクロ回転が右系と左系では、明らかに前者が坏B生産の主体を担っていたことがわかる。右回転に統一される林窯群Bグループで坏B率が高いことと関連性をもつものと予想する。六字ヶ丘支群の坏B特徴を林窯群Bグループとの比較で述べれば、第1点はA類とした無鉢蓋と椀型身のセットが定量存在することである。坏Aの逆転型と言えるものであり、手持ち削りが見られることも特徴と言える。第2点は身体部に入念なカキ目が施され(C類)、それに脚が付く高脚椀的E類が定量存在することである。蓋天井にもカキ目調整されるものは多く、1・2号窯いずれでも定量を占める。第3点は蓋天井をヘラ切りのままとするものは基本的ではなく、回転ヘラ削りかカキ目調整を基本とする比較的作りのよいものが目立つ傾向にある。第4点は口縁部手前にくぼみをもつものが主体の中で、く



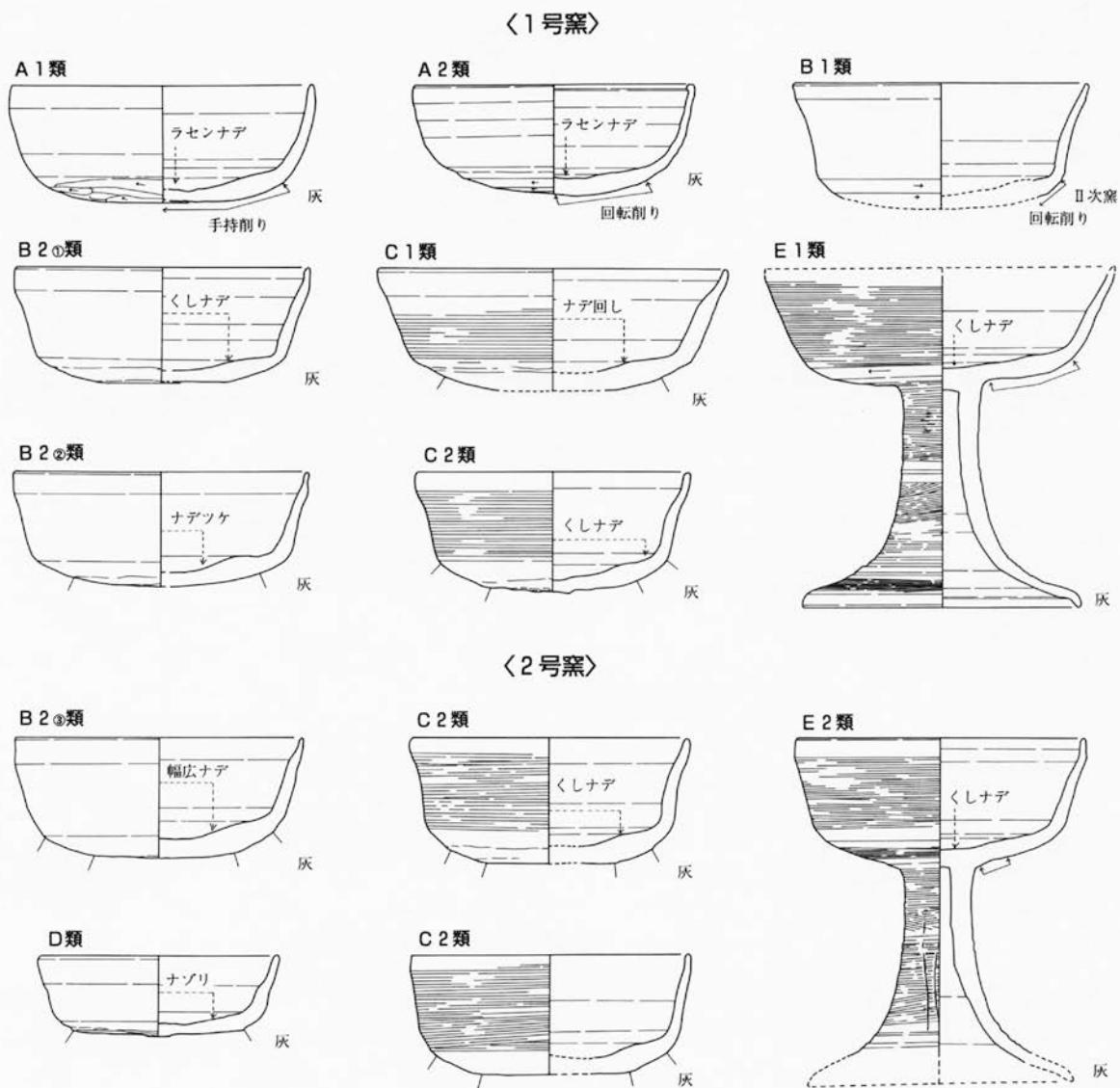
第142図 六字ヶ丘支群の須恵器壺B蓋類型図 (1/3)

ほみもたないものは棒状つまみをもつE類を基本とし、2号窯ではそれが返り微弱化へ繋がる傾向をもつ。以上、4点を特徴とし、1号窯から2号窯へは、無鉢蓋A類が消滅し、主体類型となる蓋B類のつまみが小型化、低平となって、返り微弱型のF類が出現。小法量のものが定量見られるようになる。

1・2号窯の類型の継続性は蓋では主に口縁部・返り器形とつまみ形に出ており、作り癖に匹敵するものと予想する。また、系統的には蓋B類を主体的系統とし、蓋C類はそれに付属する形態、E類は他系統の少数派と考えたい。タカヤマ1・2号窯との比較では、1号窯が少数であるため不明だが、2号窯とは唯一のロクロ回転右系の蓋c類が六字ヶ丘蓋C類に対応。回転方向は不明だが、棒状つまみや口縁部形態から考えて、鏡蓋B 1類も六字ヶ丘蓋E類の系統にあるものと予想する。左系の製品は、右系とは全体的な形態において、系統が異なり、また、その中で主体を占めるa類が天井ヘラ切りのままであることも右系との大きな相違点と言える。まとめると、林窯群Aグループの系統分類は、左系で多数派と少数派の2系統、右系で多数派1と少数派2の3系統となるが、この系統分類が壺Aで見られたような精緻・熟練の多数派に対する稚拙・未熟の少数派の様相を呈しておらず、壺Aで提示した系統分類とは質的に異なるものと予想する。右系の中では、いずれも熟練系統の中での類型の差ではないかと考えている。

c. 林窯群Aグループと林窯群Bグループの相違点

以上、林窯群に存在する2つのグループの壺B類型を概観してきたが、両グループ間での端的な相違点は壺B生産量にある。これはAグループの半数近くを占める左系がタカヤマ1・2号窯での壺B占有率の低さを見る限り、壺B器種生産に積極的でなかったことがその要因と言える。タカヤマ2号窯で見



第143図 六字ヶ丘支群の須恵器坏B身類型図（1/3）

られる左系の坏Bは、蓋・身とも右系に比べると、やや粗雑ないしは稚拙な感じを受ける製品で、坏Aではさほど感じなかったが、右系の熟練類型よりは技術的に落ちるものと言える。右系の中での両グループ対比では、Bグループで確認されなかった無鉢蓋+椀型坏がAグループの古い段階で定量確認されたこと、Bグループのオオカミダニ1号窯段階まで定量見られる鉢型の深坏がAグループでは出現期のみに止まること、Aグループの身の一定量が無スカシ高坏脚の付く高脚椀型を呈することの3点が目立つ相違点と言えるが、また、Aグループでの棒状つまみの存在、Bグループでの乳頭状つまみの存在なども違いとして上げられる。

(2) その他の器種に見られる林窯群Aグループ、Bグループの相違点

a. 高坏

林窯群Bグループでは坏類でロクロ右回転に統一される状況と同様に、高坏においても右回転に統一されるが、Aグループにおいては、坏類の状況と明らかに異なる。つまり、Aグループの特にタカヤマ支群で坏A・B類に定量見られた左回転は、高坏では主体を占めず、逆に右回転が大半を占める。これは高坏製作工人と蓋坏工人とが異なる可能性を示唆し、一つの窯に関わる工人構成は複雑な様相を呈し

ていたと考える。また、高坏A身の身口縁部と受け部形態、蓋の口縁部と稜形成などにおいても、坏Aと明らかに異なる特徴が看取でき、その可能性を裏付ける。このように器種によって、製作者が異なる可能性がある訳で、高坏においても蓋坏同様に、類型を整理・対比しなければ、工人構成などは語れないのであるが、全形を知る資料が乏しいため類型整理できず、特徴的な部分だけ列挙して、概観を述べるに止めたい。

まず、器種構成のグループ間相違としては、Bグループでオオカミダニ2号窯から定量見られる無スカシ脚の椀型無蓋高坏（坏部下位に1段稜を形成する比較的大型の無蓋高坏）がAグループでは極めて低い率でしか存在せず、特に左系主体となるタカヤマ1・2号窯では出土していないことが上げられる。タカヤマ1・2号窯では無スカシ脚部の出土もなく、当器種の生産はほとんど行われていないと言える。ただ、六字ヶ丘支群では少量ながら確認でき、無スカシ脚も坏Bの脚高タイプの脚部としてではあるが、定量生産される違いはある。また、脚部2方スカシの存在について見ると、Aグループでは未確認であるのに対し、Bグループでは各窯に定量存在し、これも明らかな相違点として提示できる。

次に、細部形態での比較ではあるが、蓋に見られるBグループの特徴的な極厚天井部と下側抉り沈線状の稜形成、高坏脚部に見られる脚部下段沈線の部位や脚端部形態での違いなどでも両グループ間の相違は確認でき、おおまかではあるが、両グループでの作り癖は窯を越えてしっかりと保持される。

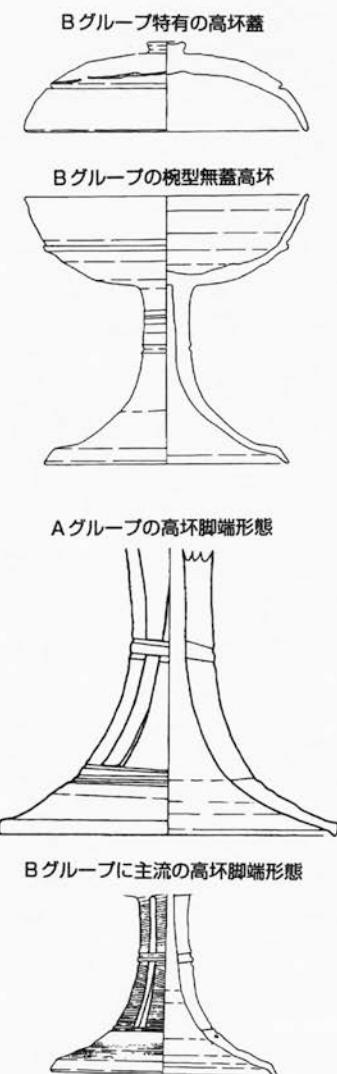
b. 鉢類及び小型貯蔵具

少ない器種であるため、グループを通した傾向を出すことは困難であるが、生産量や特殊器種の存在からおおよその傾向は出る。まず、總について、AグループよりBグループが明らかに占有率低く、Aグループは口頸部をBよりもひとまわり大きく、厚手に作る傾向がある。小型壺は、ベースとなる短頸壺形態のA類がどの窯でも主流であるが、タカヤマ1・2号窯では金属器模倣的な鉢状器形のものが定量見られる。六字ヶ丘支群でも金属器的タイプは定量存在するが、やや大型化してくびれ鉢となる。このタイプの器種はBグループでは未確認のものである。

c. 貯蔵具

タカヤマ2号窯の製品集積場からまとまった貯蔵具の出土があり、出土量で比較することは誤差が大きく、細部形態から見て行くこととなるが、小型貯蔵具がそうであったように、対比するに足る資料は乏しい。その中では甕が資料的に充実し、対比可能な項目が揃っている。以下に、大甕の口縁部文様、把手付中甕の口縁部形態、胴部叩き文様の3点において、比較していく。

(大甕の口縁部文様) タカヤマ3号窯の出土が僅かであるため、オオカミダニ支群と合わせてみるが、全体的にBグループの窯は大甕出土量自体が少ない傾向にある。口縁部文様はいずれの窯も波状文主体の文様構成をもち、タカヤマ1・2号窯で見られる沈線文のみか沈線文+連続刺突文が過半数を占める状況とは大きく異なる。タカヤマ1・2号窯の文様構成は、六字ヶ丘支群にも共通し、特に六字ヶ丘支



第144図 A・Bグループ
特有の高坏形態 (1/4)
(県保存協会1993及び
小松市1993より転載)

群では波状文構成をもつ口縁部はなく、縦刷毛文様を沈線文と組み合わせるものも見られる。六字ヶ丘支群での大甕出土量は明らかにオオカミダニ支群よりも多く、Aグループでは目立つ器種と言える。

(把手付中甕の口縁部形態) 大甕はAグループで目立った器種であったに対し、把手付中甕はBグループで目立つ器種と言え、タカヤマ3号窯では中甕の半数を占める。本来、把手の付かないタイプの中甕に把手の付くものもあり、オオカミダニ支群では小型容量のものにも付けられる。また、Aグループが口頸部の比較的薄いものが目立つのに対し、Bグループの口頸部は重厚なものに統一され、類似する形態のものが多い。

(胴部叩き文様) いずれの窯でも外面H b類、内面D a類が主体であり、それが9割以上を占める状況には違いがない。ただ、僅か数%の率だが、他の叩き、当て具文様が確認されており、その量によって、タカヤマ1・2号窯と3号窯で違いが見られる。1・2号窯は外面H c類と内面D b類が定量見られのに対し、3号窯ではほとんど未確認で、逆に外面H a類が4%の高率で存在する。D b類当て具の存在は、六字ヶ丘支群でも定量確認できるものであり、オオカミダニ支群の状況は未確認ながら、窯群グループレベルで異なる可能性は高いと感じる。これ以前では未確認のD b類がBグループではほとんどなく、Aグループで定量出現していることは、大甕口縁部文様の新出系文様と対応する可能性があり、興味深い。

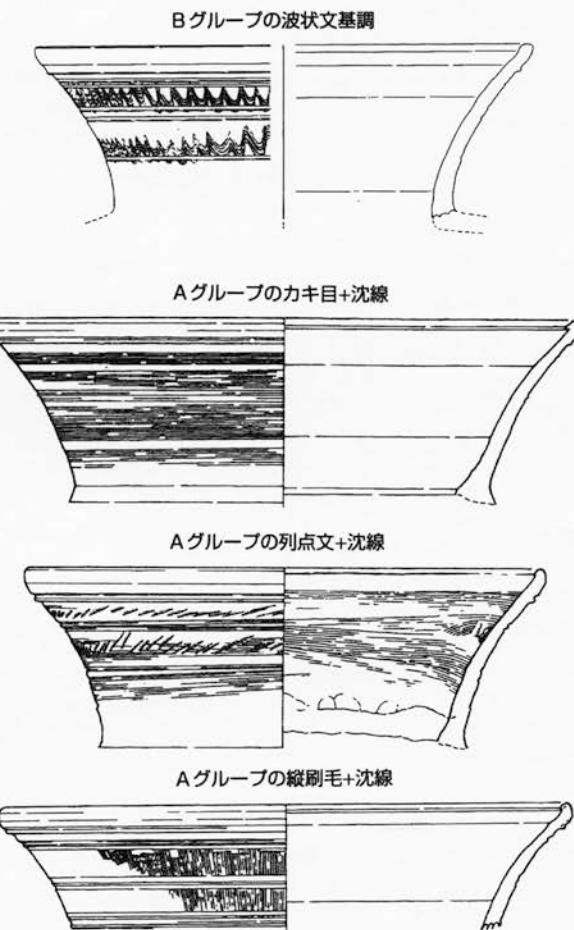
4. 林窯群の須恵器窯構造及び窯道具の類似性と両グループの特徴

(1) 窯構造

林窯群で検出される当期の須恵器窯は、焼成部上半以上を欠損する六字ヶ丘1号窯を除いては全て排煙口が奥部へ開口し、そこに排煙調整溝が直接連結する窯構造（排煙調整溝付窯の奥部開口型）をもつ。窯体長も特殊小型の形態をもつ六字ヶ丘3号窯を除いては、10m以上を測るものであり、紡錘形を呈す窯体プランに統一されることから考えても、窯群の中で一つの構造に統一された様相をもつ。しかし、燃焼部形態や焼成部断面形、床面構造及び置台設置など、細部において差異があり、それらを整理すると、AグループとBグループの相違点が見えてくる。

a. 燃焼部形態

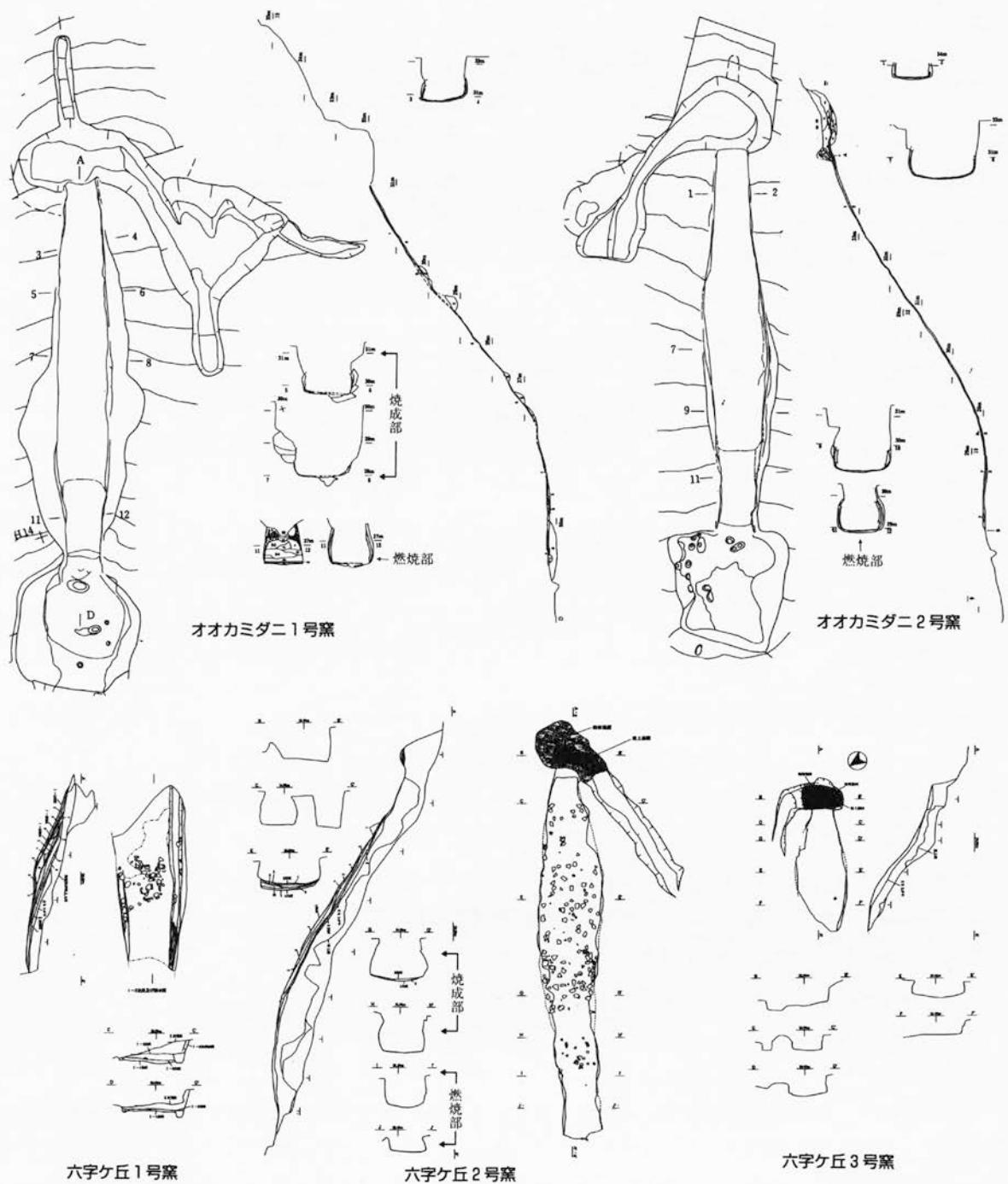
焼成部境から奥が地下掘り抜き式の構造であるのに対し、燃焼部は上から掘削する天井架構構造をもっており、焼成部口から焚口まで同じ幅で長く設定する特徴をもつ。これは両グループにおいて確認されるものであるが、燃焼部壁の傾斜が若干異なっている。Aグループはタカヤマ1・2号窯で見るように、側壁は直立かやや開き気味で、2号窯の天井架構材から見ても、天井はドーム状ではなく、平屋根



第145図 A・Bグループ特有の大甕口頸部形態 (1/6)
(県保存協会1993及び小松市1993より転載)

状を呈するものと予想される。これに対し、Bグループは側壁がやや内傾気味で、タカヤマ3号窯では焼成部口手前で上部アーチ状を呈し、アーチ型に近い天井を呈するものと予想する。オオカミダニ1号窯の焼成部口においても同様の痕跡が見られ、この部分だけであるかもしれないが、Bグループの窯は焼成部口付近では燃焼部も絞り込みを入れる構造であったと考える。それを示すように、タカヤマ3号窯には焼成部境の窓壁を補修粘土貼り付けで強く絞り込む特徴が見られる。

b. 焼成部形態



第146図 オオカミダニ支群と六字ヶ丘支群のI1期の須恵器窯 (1/200, 県保存協会1993及び小松市1993)

時期が新しくなるにつれて、徐々に焼成部中位付近の胴張りが弱くなり、細長い形状となってくるため、微妙な差ではあるが、排煙口の絞り具合によって、排煙口で強く絞り込むAグループと、排煙口手前から徐々に幅を狭める口の絞りの弱いBグループとで差が出てくる。また、窯体断面形においても、Aグループが床面平坦で側壁への立ち上がり明確であるのに対し、Bグループの床はやや中軸上が下がる傾向をもち、側壁立ち上がりも緩く転換する。前者がカマボコ型であるのに対し、後者は管状を呈し、それは床面構造とも大きく関連する。

c. 床面構造及び置台設置

床面のかさ上げ回数の多少が焼成回数にそのまま直結すると言われがちであるが、床をかさ上げしなくとも焼成回数の多い窯は存在しており、かさ上げはどちらかと言えば、床面造成や床面傾斜の改造に目的があったものと考える。つまり、床面枚数は床面造成の仕方に関わる要素であり、Aグループの4基で12枚の床に対し、Bグループの3基で4枚の床というように、単なる偶然ではなく、明らかにそこには床のかさ上げや貼り土に目的意識がある。タカヤマ2号窯の1次地山床を剥がして床を貼っている行為はそれを示す典型例と言えよう。しかも、このAグループの全ての窯の床で敷砂が伴っており、坏Aを使用するような置台は砂に埋め込んで設置している。Aグループの床では石の置台設置は比較的少なく、焼成部上位に集中する傾向が見られるが、Bグループの床では焼成部中位付近まで石置台が設置され、列状に並んでいる。置台に坏Aを使用することは少なく、地山床をそのまま使用することを基本とし、石の置台は床に埋め込み、その上に須恵器甕胴を組み合わせて使用していたものと予想する。Aグループの床が軟質であるのに対し、Bグループの床の焼き締まりは強く、釉が垂れて製品と溶着した部分の床は剥ぎ取って廃棄している。つまり、Aグループの床が貼り土・砂をベースとして上へ床を上げて行ったのに対し、Bグループの床は地山をそのまま使い、極度に焼け過ぎたら、それを剥ぎ取って下げる使っていたものであり、床面造成技術の違いであると予想する。貼床や敷砂は地山床よりも除湿効果をもっていた可能性が強く、そう考えれば、Aグループの六字ヶ丘1号窯の焼成部床暗渠排水溝も同様の意図で掘られていた可能性をもつ。

(2) 窯道具及び置台使用器種

窯の中で窯詰めに使う道具を窯道具とすれば、当期の須恵器窯では石の置台を初めとして、須恵器坏の焼成前のものを置台として使用したもの、須恵器甕などの製作途中での破損品を置台として使用したもの、須恵器貯蔵具製作時の頸部切り屑を噛ませ台として使用したもの、坏Aや甕の製作途中の破損品ないしは完成品を焼成前に穿孔して焼台に転用したもの、須恵器焼成後の破損廃棄品を置台として使用したものなどがある。全ての道具がどの窯でも均等に使われていたのではなく、窯によって差があり、それは窯の構造とも深く関連する。窯構造ともあわせ窯業技術の違いを示すものと言え、それを整理し、対比すれば、窯焚き技術の違いを導き出すことが可能と言える。窯構造で、AグループとBグループを対比したように、ここでも比較しながら、その特徴を整理する。

窯構造の違いでも述べたように、Bグループは石の置台を多用しており、須恵器甕胴部破片と組み合せて使用する例が多いと言える。タカヤマ3号窯の窯内出土の須恵器甕のほとんどが接合不可のものであるのはこのためで、棚板的使用の可能性をもつ。灰原内の廃棄品を使用する場合と製作途中に破損した焼成前の廃棄品の両方があったと思われるが（本文報告50ページ）、焼成中の収縮を前提として、それらを使い分けていたものと予想する。タカヤマ3号窯で窯床より出土するものが上記の須恵器甕破片以外、ほとんど確認できなかったが、オオカミダニ支群では定量の須恵器坏が床に遺存しており、坏Aを置台として設置する事例も比較的多く確認できる。床に坏Aの未焼成品を置台として設置する事例

はタカヤマ1・2号窯で多く確認される。敷砂床に潜り込ませて設置するものが多く、石置台の代わりにするために伏せて使用する場合と丸底製品を固定するために口を上に向けて使用する場合がある。蓋や身を重ねて使用するものと、蓋、身単独で使用するものとがあり、前者はそのまま製品として出荷、後者もその可能性があるが、置台設置当初から単なる窯道具として窓内に入れられたものが主体的であったと考える。このような製作当初は坏として製作されていても、何かの理由で窓詰め時には置台として窓内に入れられた坏は定量あり、タカヤマ1・2号窯ではそれが坏A蓋であった可能性が高い（本文報告78・79ページ）。これは、窓内遺存須恵器や灰原内須恵器の坏Aの蓋・身構成率が2：1程度を示すことから考えており、その傾向は六字ヶ丘支群でも同様に見られる。これに対し、タカヤマ3号窯やオオカミダニ支群では蓋・身構成が大きく偏ることなく、身の率が高い程度であり、蓋・身セットで窓詰めされるものが多かったものと言える。つまり、Aグループは石の置台ではなく、須恵器坏Aを主体的に置台使用したものと言え、その置台は一回毎に取り外される性格のものであったようである。これに対し、Bグループでは石置台を窓の築造の際に埋め込んでおり、固定式のものであったと言える。

また、当窓では坏A蓋未焼成品の天井部に円孔を開けて焼台としたものも現れ、甕胴部未焼成破片に円孔を開けたものも同様に出現する。このような窯道具は極めて少ないが、全てタカヤマ1・2号窯で出土していることは注目してよく、Aグループの坏A未焼成品の窯道具使用と同様の性格をもつと考えられる。同様に製作途中の不用品を未焼成のまま窯道具として使われるものが出土している。大甕や横瓶などの頸部別作り接合する貯蔵具の頸部整形の際の切り屑がそうであり、製品同士間や置台との噛ませ台の可能性をもつ。前記の窯道具同様、Aグループでの出土が目立ち、Bグループでは極めて少ない。

整理すると、Aグループは須恵器製作時に出る不用品や製作失敗品、そしてそれを専用の焼台とするため改良を加えたものなど、須恵器製作に強く関連するものを窯道具として使う傾向が強く、それは一回毎に置台設置することに起因し、製品と同様に収縮する未焼成品を使用する必要があった。床面の貼土改床、敷砂に強く関連するものであり、製品製作と一体的に行われたものと言えよう。これに対し、Bグループは地山床をそのまま使い、置台も床に埋め込んで固定する方法が採られており、床面構築時に半恒久的に設置される構造であったと言えよう。

5. 林窓群の工人組織

(1) 須恵器製作段階での工人構成と工人組織

須恵器坏Aの類型区分からタカヤマ1・2号窓と六字ヶ丘支群窓をAグループ、タカヤマ3号窓とオオカミダニ支群窓をBグループに分け、各グループ内で構成される工人の在り方を述べたが、工人構成とその編成の在り方を中心に以下に整理する。

a. Bグループ

Bグループは3基の窓が順に築かれ、移動して行く窓場で、全て右回転のロクロ成形台に統一され、他器種においても同様である。工人集団を示すような特徴ある作り癖を共有する類型の集合体があり、それを系統として扱えば、Bグループの中では4系統確認できる。ただし、この中で主体を占める①系は7割近くを占める熟練した薄手作りの集団で、細分類型も3～5類型と多い。これに次いで多いのが、稚拙な厚手作りの②系で、同様の厚手作りをする③系と併せて2～3割程度を占める。また、④系とした精巧で大ぶりな作りのものもあるが、これは①系の中での特徴ある形態のもので、同族性をもつ。以上、4系統は①・④の精巧薄手大ぶり製品を作る熟練工人集団と②・③の稚拙厚手小ぶり製品を作る未熟工人集団に大別される。これらの工人が製作した坏Aは単なる工人の作り癖というよりも、製品としての大きさや質が異なり、焼き方も前者は釉の被る場所に窓詰めされ、後者はやや生焼け気味に仕上がる。

るという特徴をもち、後者には火膨れする胎土も使われている。主体を占める工人集団が好条件にあつただけでは済まない、製品価値に繋がるものであり、何故このような2種類の製品が存在していたか疑問に感じる。熟練を指導工人、未熟を被指導工人という立場ではこのような種類の相違は理解できず、熟練と未熟という技術の違いだけではない、2種類の製品を意識的に製作していた可能性もあると考えておきたい。

これまででは坏Aから工人集団を考えてきたが、このような質の異なる2つの集団は他の器種の中で捉えることは難しく、全て熟練工人の製作の感がある。その中ではタカヤマ3号窯の坏B工系は他の主体となる系統とは異質の作りをするもので、このようなものが坏A②系に対比できる可能性をもつ。それでも両器種の接点は積極的には存在せず、器種間での照合は困難と言える。この段階では確実に坏Aよりも坏Bは良品であったわけで、そのような製品には主体となる工人集団が製作にあたったと考えるのが自然と言えよう。坏Bの中で見られる類型は、型式変化の中で出てきたものもあり、全て工人の系統を示すものとは言い難く、坏A①系工人集団が製作にあたったと考えるのが妥当であろう。

b. Aグループ

Aグループは窯の改造も含め、6基で構成される。作り癖の一一致する坏Aが2基の窯で同時に焼成されていることから2つの窯場での同様操業と捉え、窯の前後関係に基づいて、タカヤマ支群をタカヤマ1—I次窯→タカヤマ1—II次窯→タカヤマ2号窯、六字ヶ丘支群を六字ヶ丘3号窯→六字ヶ丘1号窯→六字ヶ丘2号窯の連続操業する併存する2つの窯場をもつグループと考えた。工房がひとつか複数存在するかはわからないが、一つの工人集団と言える須恵器坏Aが両窯場にまたがって焼かれることは確かで、さらに、1基の窯の坏A製作に携わる工人集団数も通常より多く確認されるのが特徴である。ロクロ回転が左と右に分かれ、Aグループ全体の中では両者は拮抗した割合を示すが、当初は窯の中で近い割合を占めていた両者も、最終段階の両2号窯ではタカヤマは左、六字ヶ丘は右にほぼ統一され、系統の異なる工人集団ごとに窯が分けられるようになる。ロクロ右回転工人では粗雑な作りをする(3)系と薄手で丁寧な作りをもつ(4)系に分け、(3)系は各窯ともほぼ3類型、(4)系はほぼ2類型にまとまるものと考える。左回転工人で主体となる工人集団は(1)系であり、ほぼこの系統に統一されているが、作りの異なる少数派が1~2割の率で存在し、それらを(2)系としている。ただ、(2)系はそれで一つの工人集団を形成するような作り癖を保持せず、窯ごとに異なる傾向はあり、(1)系に対してその他の類型として存在する。(1)系はタカヤマ2号窯で最大5類型細分しているが、他の窯に合わせるとほぼ3類型程度にまとまるものと考えている。

以上、須恵器坏Aを見る限りでは、その製作に携わる系統的な作り癖を共有する工人集団は右回転のもので2つに、左回転ではほぼ1つにまとまり、右回転で存在する2つの工人集団はBグループ同様に、熟練と稚拙という特徴を保有する工人ということになる。左回転は熟練に位置付けでき、それぞれの工人集団でほぼ3類型の工人単位が存在するものと推察する。ロクロ回転方向の違いは、数点単位では利き手の違いや作る段階での方向逆転も考えられるが、これだけのまとまりを示すものをそのように解釈することは無理があり、ロクロ成形台自体が異なるためと考えるのが自然と言える。つまり、須恵器製作の根底となる製作台が異なる訳であり、右系と左系に関しては、右系の中の(3)系と(4)系の工人集団の違いというレベルではない、全く異質の工人集団と考えるのが妥当と言える。当須恵器窯の構造導入が朝鮮半島との関連で考えているため、そのような渡来系工人が当地の須恵器生産にかかわった可能性は高く、当時の国内のロクロ回転方向がほぼ右回転に統一されている状況を考え合わせると、左系は渡来系工人であることも可能性として考えておく必要がある。

別工人集団や別組織の工人は生産の識別目的に古墳時代ではヘラ記号を記すことが多いが、A・Bグ

ループ全ての須恵器坏を見ても、ヘラ記号を記したものは数点であり、極めて稀な行為であったと言える。現に異なる工人集団が一つの窯に須恵器を窯詰めしているわけで、これは須恵器製作者が生産を管理する立場になかったことを示すだろう。つまり、実際の操業に携わらない第3者が窯の経営・管理にあたっていたものであり、製作と焼成とが分離経営される可能性もある訳である。また、当地での開窯に際し、寄せ集め的に徵収された複数の工人集団を、集団の出自に関係なく、所属を決定し、各工房及び各窯場に分散させていた可能性もある。いずれにしても、その背景には、複数の工人集団を掌握・管理する窯場経営者が存在しており、これまでの生産体制とは異なる新たな編成のもと、新規工人も加入了形での生産体制が採られていたものと言えよう。

これまで、坏Aの右系と左系の存在から工人組織を考えてきたが、左系に統一されるタカヤマ2号窯の坏A以外の器種を見ると、高坏では右系が半数を占めるなど、必ずしも左へ統一される訳ではなく、実際には右系工人も製作に主体的に携わっていたことになる。器種間での工人単位を前提とした類型照合は極めて困難なため、どうしても特定器種から求めた作り癖の類型を須恵器窯に携わる工人と考えがちであるが、そもそも口クロ成形のものと紐積み叩き成形のものでは技術的に異なっており、製作する器種によって工人が異なっていた可能性は十分にある。器種によって異なる工人集団を形成することも考えられる訳であり、厳密な意味で工人組織を復元する作業は極めて困難と言える。本論では窯間で渡り歩くような工人集団の姿がおぼろげなりとも捉えられたことで十分な成果と考えている。

(2) A・B グループに存在する工人組織の在り方

これまで須恵器製作段階での工人集団と編成について、各グループごとに述べてきたが、隣接する両グループはどのような関係にあったのであろうか。須恵器坏Aを見る限りでは、グループ間での工人集団の入れ替えや介入などは看取できず、それは高坏の作り癖、坏B形態、他の貯蔵具類でも、同様である。また、築窯における細部の形態や床の造成方法、窯詰め、焼成方法もグループ間で相違点は確認でき、その技術が敢然と守られているように感じる。さらに、両グループ間での焼き上がりの質感の違いは、グループを主張するかのような意識的なものを感じられる。製作段階でのグループ間の工人交流がなかったように、窯の築造、焼成に際してもグループ間ではっきりと分けられている。

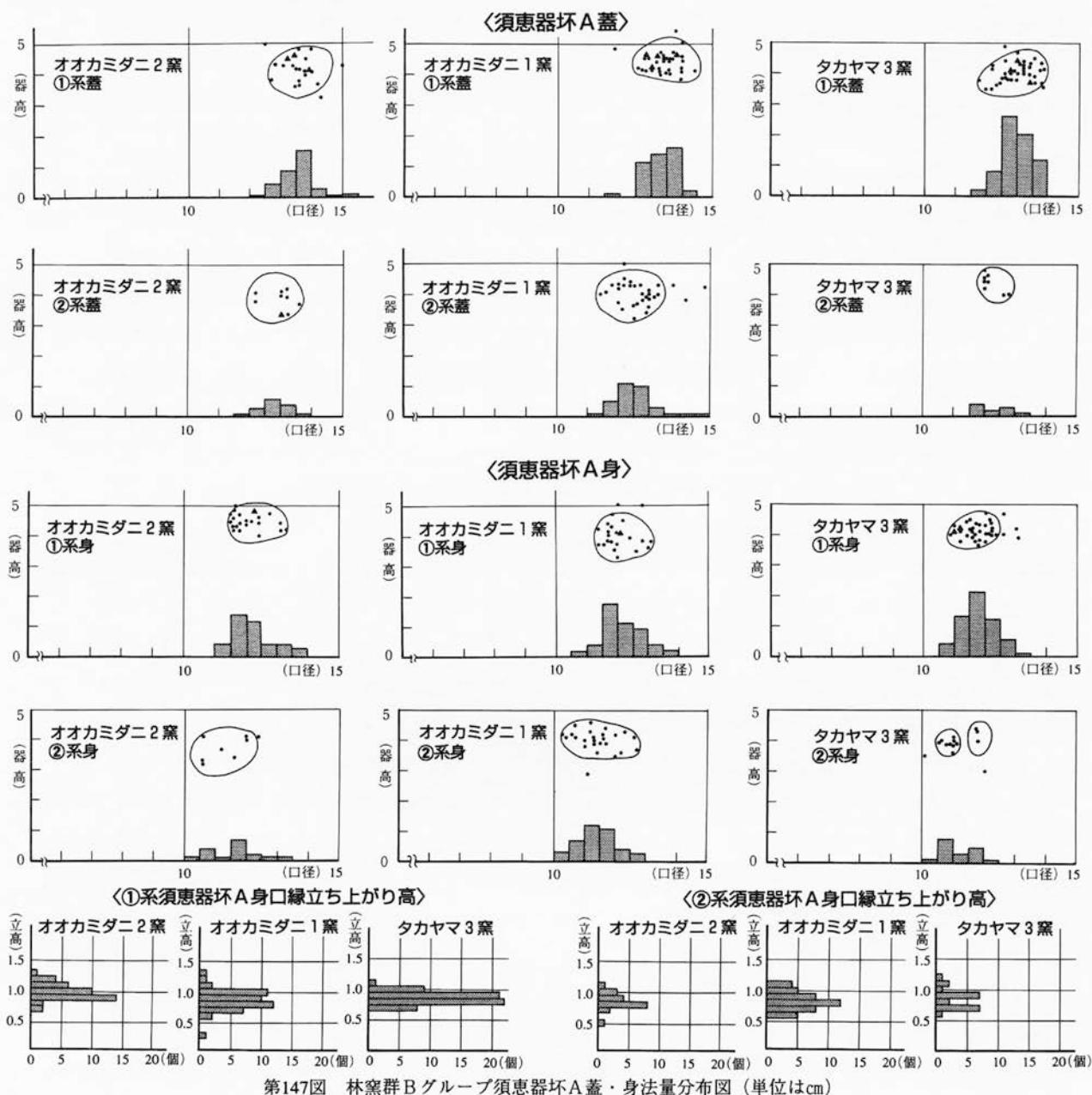
Aグループに見られる製作段階での不用品などを窯道具として使用されることやBグループの熟練と未熟に分けた工人集団の製品が窯詰め場所を意識的に分けられていたように、製作と焼成とは密接な関係にあり、粘土採取・生成、製作・乾燥、築窯・管理、窯詰め・焼成・窯出しの作業を一体的な作業としてグループ内の工人集団で分担ないしは一括する形で行っていたものと考える。窯の立地からは林窯群内での集中経営のような様相と言えるのだが、須恵器製作集団としては別組織であり、工人編成や工房経営も別であったろう。では何故、このように集約経営されたのであろうか。Aグループの工人構成・集団編成に見るように、複数の工人集団を寄せ集め、それを2つの窯場で同時期に焼成するような、複数の工人集団を第3者が管理・経営する組織編制であり、工人組織を強く管理する形でこの林窯群が開窯、経営されたことを伺わせる。それは6世紀代の工人編成が工人集団内の長を中心としたものであったために、それを否定する立場で意識に集中経営されたものであり、それまでの地を離れ、新たな窯場で再編成のもと工人組織が組まれることが重要な意味をもっていたと感じるのである。ただ、林窯群全体で、同一の窯構造をもつ点や須恵器坏B蓋のつまみに偏平形が採用されている点（南加賀窯跡群の南群にある金比羅山支群では同時期に偏平つまみを付すものではなく、北陸の周辺地域でも同様に未確認である）、高坏の脚部や高坏蓋に古手の様相を色濃く残す点など、林窯群全体に浸透する特性を示す部分は遺存しており、それは地域性として南加賀窯に根強く残る江沼の保守性であると考える。工人た

ちは南加賀窯の地元工人を主体として構成されたことを示すと言えよう。

6. 林窯群A・Bグループの須恵器坏類から見た編年序列

(1) グループ別の須恵器坏A編年序列と変化の法則性

これまで林窯群をA・Bグループに分け、そのグループ間での相違点などを整理し、グループ内での工人構成と全体での工人組織について述べてきた。A・Bグループの須恵器坏類は、坏Bを見る限りにおいてはほぼ同時期と思わせるものであっても、坏Aにおいては様相が異なっており、また、同じ窯の製品であっても、系統が異なるれば、異なる法量をもつことが理解された。当期の坏Aの編年序列を示す場合の法則性として常に言われている「一器種一法量」と「口径の縮小」をこれらの坏Aに当てはめた場合、対象とする坏Aがどの系統に属しているものかによって、序列の前後関係は大きく揺らぎ、一時期に焼かれた資料であっても、型式的には前後関係があると判断される危険性をもつのである。これは、最近の7世紀須恵器編年を再考した古代の土器研究会シンポジウムでも指摘されていることであり、当

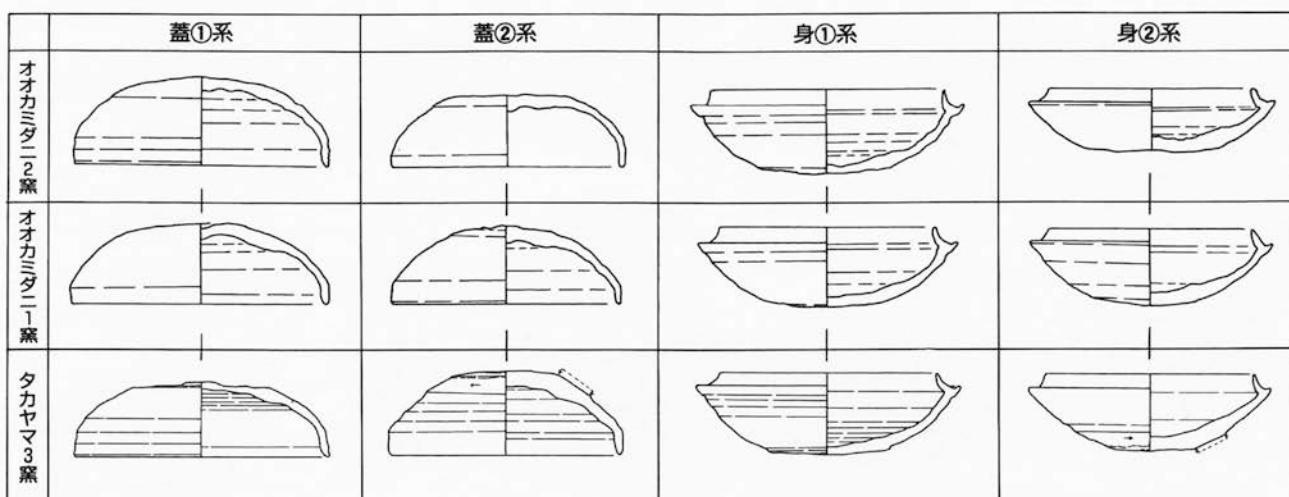


第147図 林窯群Bグループ須恵器坏A蓋・身法量分布図 (単位はcm)

期の須恵器編年を構築する上での注意事項と言えよう。本稿は、この点を鑑み、まず、A・Bグループごとの須恵器坏Aをさらに系統別に整理したうえで編年序列、その変化の法則性を抽出して行きたい。その上でグループごとの坏Aの特徴と変化の法則性を整理する。

a. Bグループ坏Aの系統別変化の法則性

前に述べたように、熟練の①系（④系も含む）と稚拙の②系（③系を含む）とがあり、これらを分けて提示すると第147図となる。①系と②系の法量の違いは、いずれの窯でも同じ傾向で見られる。①系は中心をはっきりともち、そこから前後5mmの1cmの幅で分布するのに対し、②系は5mm程度を開けて二つに中心が別れ、口径の大きなものはやや浅身となる傾向をもつ。②系の主体は小法量で、①系の法量と比べると、7～8mmの口径の違いがある。2系統での法量の違いは、身口縁部立ち上がり高でも同様に見られ、口径同様、②系よりも①系が1mm程高く分布している。以上のように、2系統の須恵器坏Aで同じような法量分布のズレが見られる訳で、つまりは①系と②系は同じ方向性をもって法量変化していることになる。まず、①系の蓋を見ると、オオカミダニ2号窯からオオカミダニ1号窯へは口径で変化ないものの確実に器高が低下し、タカヤマ3号窯でさらに器高低下が進行する。また、3号窯では明瞭に中心となる口径が縮小しており、全体の流れとして口径縮小とともに器高低下する法則性が見られる。これに対し、②系は2号窯→1号窯→3号窯と口径の中心は5mm程度ずつ段階的に縮小し、①系よりもその変化は明瞭であるが、器高低下ではなく、3基の窯とも同じ器高で推移する傾向をもつ。これは身においても同様の変化の法則性をもち、口縁部立ち上がり高で、①系が低下するのに対し、②系が低下しないというような、法則性がより明瞭となる。②系は身立ち上がりが最初から低い形態をもち、椀型の器形を保持する中での変化と言えるのに対し、①系は全体的な形として徐々にではあるが浅く小ぶりの形態を志向してゆくもので、身立ち上がりの低下も同様の流れとして内傾が強くなることに伴うものと言える。

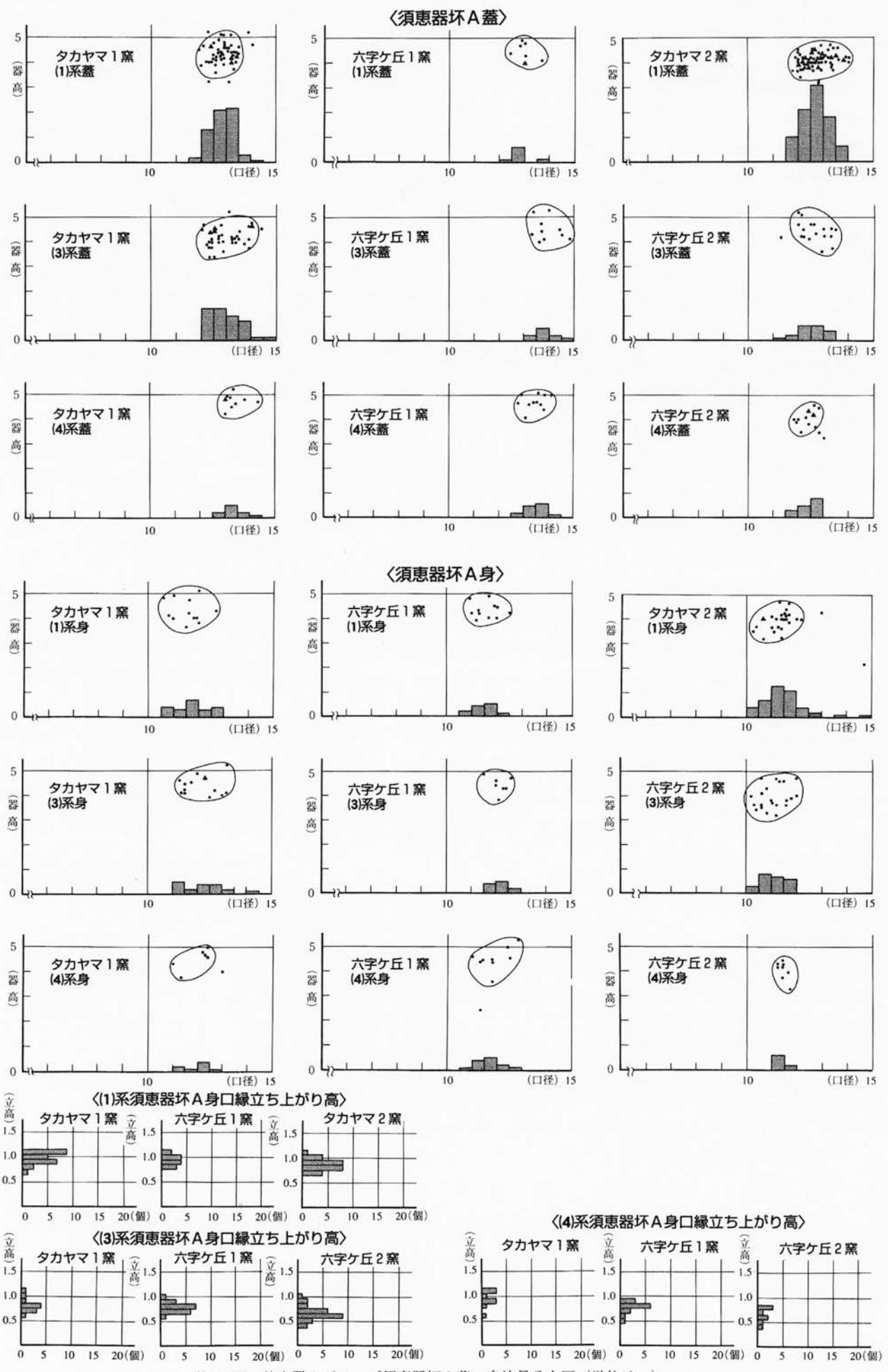


第148図 林窯群Bグループ須恵器坏A蓋・身の系統別変化 (1/4)

b. Aグループ坏Aの系統別変化の法則性

Aグループはタカヤマ支群と六字ヶ丘支群とに別れ、同時進行で2基の窯が焼かれていると想定している。つまり、タカヤマ支群は1号窯I次窯→同II次窯→2号窯、六字ヶ丘支群は3号窯→1号窯→2号窯で、3基の窯がそのまま対応するか分からぬが、2支群で開窯した時期と最後の窯はほぼ同時期ではないかと考えている。

まず、左回転の(1)系について、タカヤマ支群1・2号窯を対比すると、蓋・身ともに口径の縮小と器高低下が見られる。身立ち上がり高も明瞭に低下し、Bグループの①系で見られたような形態変化が見



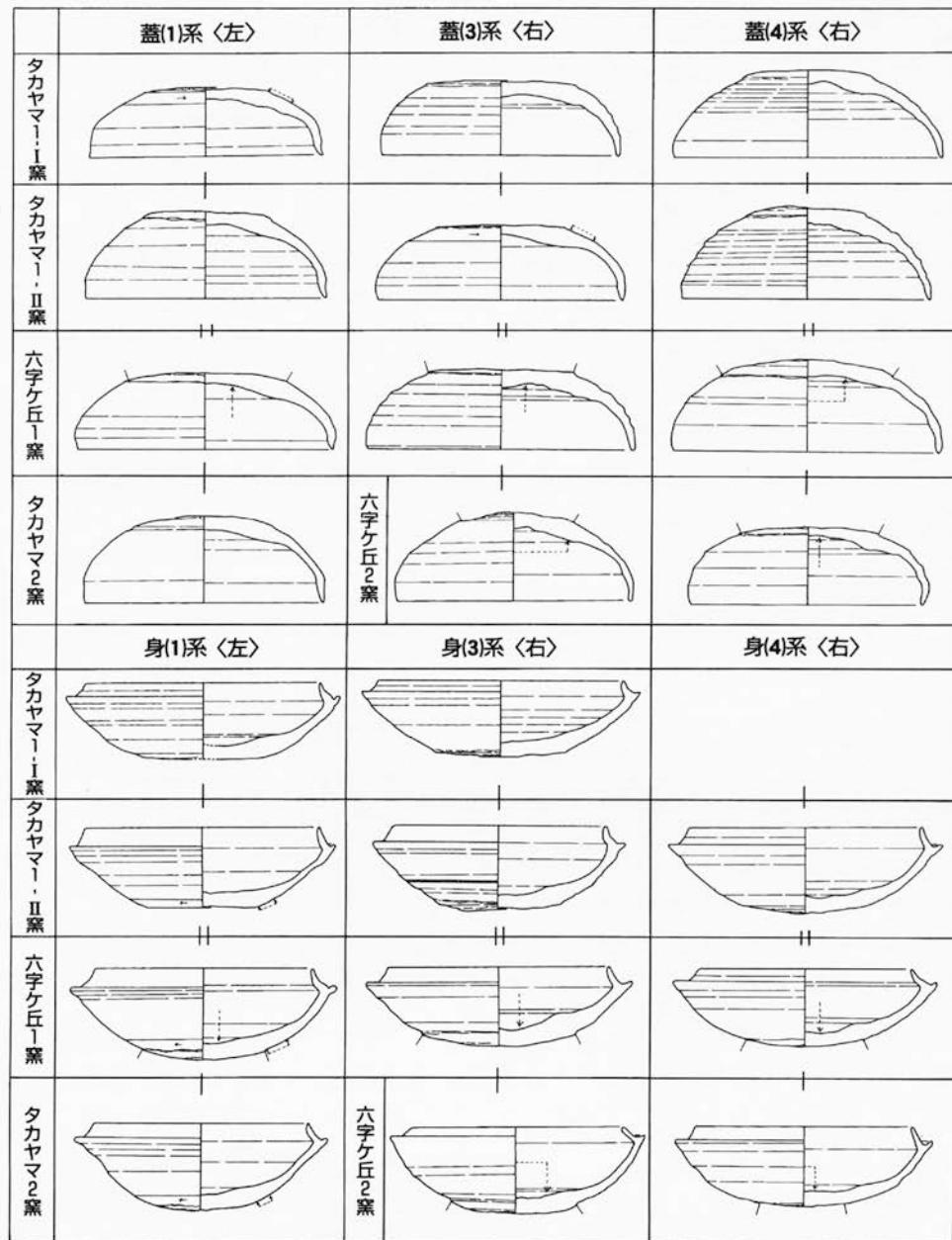
第149図 林窯群Aグループ須恵器坏A蓋・身法量分布図（単位はcm）

られる。以上の2基の窯と六字ヶ丘1号窯の(1)系と対比すると、口径の中心的数値はタカヤマ支群2基の中間を示す。ただ、口径、器高の分布図ではタカヤマ1号窯の分布域の中に全く包括される形となり、タカヤマ1号窯がI次窯とII次窯とを合わせた数値であることを考えれば、タカヤマII次窯と六字ヶ丘1号窯とは極めて近い数値を示す可能性が高い。タカヤマ支群1・2号窯の変化が強く出たのも1号窯にI次窯の資料が混在していたためであり、I次窯とII次窯を分離できれば、スムーズな変化を辿るものと考える。

次に、右回転の(3)系と(4)系について述べる。両者は厚手(3)系と薄手(4)系という形で対比可能なもので、Bグループの(1)系と(2)系の関係に対応すると考えていた類型だが、Bグループのような両系統で明瞭な主従関係をもつ構成を示さず、(3)系と(4)系が均衡する割合で生産される対等な関係をもつ。这样的なことを念頭に置いて、(3)系と(4)系とを比較すると、身立ち上がり高が(4)系よりも(3)系が低いことはAグループと同様の傾向があるが、口径では(3)系と(4)系で近接した数値を示し、窯によっては逆に厚手(3)系が(4)系よりも大ぶりの数値を示す。Aグループの1cm近くあった(1)系と(2)系の法量差とは異なるもので

あり、また、Bグループで見られた系統ごとに形態変化が異なることも確認されない。(3)系が厚手で粗雑な作りをしていることは工人の技術レベルの差を示すとも捉えられなくはないが、Aグループの(3)系と(4)系は対等の立場に近い製品であることはここで述べたとおりであり、工人の作風の違いと考えるのが妥当と言える。

まず、窯の前後関係がわかっている六字ヶ丘支群1・2号窯の(3)系と(4)系の変化を提示する。(3)系、(4)系いずれも、口径で1cm近く縮小し、器高も低下、全体的



第150図 林窯群Aグループ須恵器壺A蓋・身系統別変化 (1/4)

に小ぶりとなる。身立ち上がり高も低下、特に(3)系で2mmの低下は立ち上がりが強く寝るためである。この六字ヶ丘支群1・2号窯の(3)系と(4)系をタカヤマ1号窯に対比すると、タカヤマ1号窯がⅠ次窯とⅡ次窯に分かれるため、六字ヶ丘1号窯よりも古い様相をもつはずである。身立ち上がりを見ると確かに(3)系、(4)系ともに確実にタカヤマ1号窯の方が高く、古く印象付けられるが、口径では逆にタカヤマ1号窯の方が小さく、特に(3)系では明らかである。編年序列は上記のとおりでよいと考えるが、口径の縮小という法則性は同じ工人集団の製品であっても時間的経過の中で一定の法則性をもって進行しているとは限らず、さほど厳密なものでないことを示唆する。調整方法の変化(93ページ参照)など多くの要素での比較が必要となろう。

c. 坏A変化の特徴

各グループの系統別に坏A編年序列を提示し、時間経過の中で見られる変化の法則性を述べてきたが、系統別に中心となる数値を提示すると、第8表のとおりとなる。Bグループの①系が中では最大の法量をもち、②系とAグループの(3)系が近い数値を示す。Aグループの中では左回転の(1)系が大きい方である。系統によって法量差があり、それは変化の過程で解消される訳ではなく、大ぶりの系統は最終段階でも大ぶりを維持し、その形態を貫き通す。そのため、これらの中でどれが標準サイズを示しているのか判断することは難しく、グループ間での系統の同時性を導き出すために、系統を対峙させることは無理がある。これは大まかに言えば、ここで提示した窯の坏Aが同一型式内におさまることを意味し、坏Aが型式変化しない範囲内での時期幅であることを示す。

系統内での坏A法量変化の法則性は、前述したように、変化の度合いが均等に現れる訳ではなく、漸移的だが、口径の縮小、器高低下、身立ち上がりの低下の3項目において確認できるものであり、変化的根底に系統を越えた要因が存在する。しかし、同時期でも系統が異なれば、製品寸法はかなり違っており、どのような規制のもとでこのような変化が起こっていたのか疑問と言える。工人集団ごとに物差しに類するもので製品寸法を規格していた可能性はあるが、それが一律の規格でなかったことはここに示したとおりである。時間的経過の中で縮小という方向性が自然発的に存在していたものであろうか。この現象は古代食器変化の常にある法則性と言える。

法量種	蓋 口 径	蓋 器 高	身 口 径	身 器 高	身 立 上 高
B ①系	13.1°13.6→13.3°13.8→12.7°13.2	4.4°4.6→4.1°4.3→3.9°4.1	11.8°12.3→11.8°12.3→11.5°12.0	4.4°4.6→3.9°4.1→4.0°4.2	10→ 9→8.5
	12.8°13.3→12.5°13.0→12.0°12.5	4.0°4.2→3.9°4.2→4.4°4.6	11.5°12.0→11.2°11.7→10.8°11.0	3.6°3.8→3.9°4.2→3.9°4.1	8.5→ 8→ 8
A (1)系	12.7°13.2→12.8°13.1→12.5°13.0	4.2°4.5·4.5→4.0°4.2	11.5°12.0·11.4°11.8→11.2°11.7	4.2°4.5·4.2°4.4→3.9°4.1	10·9.5→8.5
	12.5°13.0·13.5°14.0→12.3°12.8	4.0°4.2·4.3°4.5→4.3°4.5	11.5°12.0·12.0°12.5→10.8°11.3	4.2°4.5·4.3°4.6→3.8°4.0	8→7.5→6.5
團 (4)系	13.0°13.5·13.3°13.8→12.1°12.6	4.6°4.8·4.6°4.7→3.9°4.1	12.0°12.5·11.3°11.8→11.1°11.6	4.5°4.8·4.4°4.6→4.0°4.3	10→ 8→ 7

第8表 林窯群のグループ・系統別須恵器坏A蓋・身基準法量表(単位は口径・器高でcm、身立ち上がり高でmm表示)

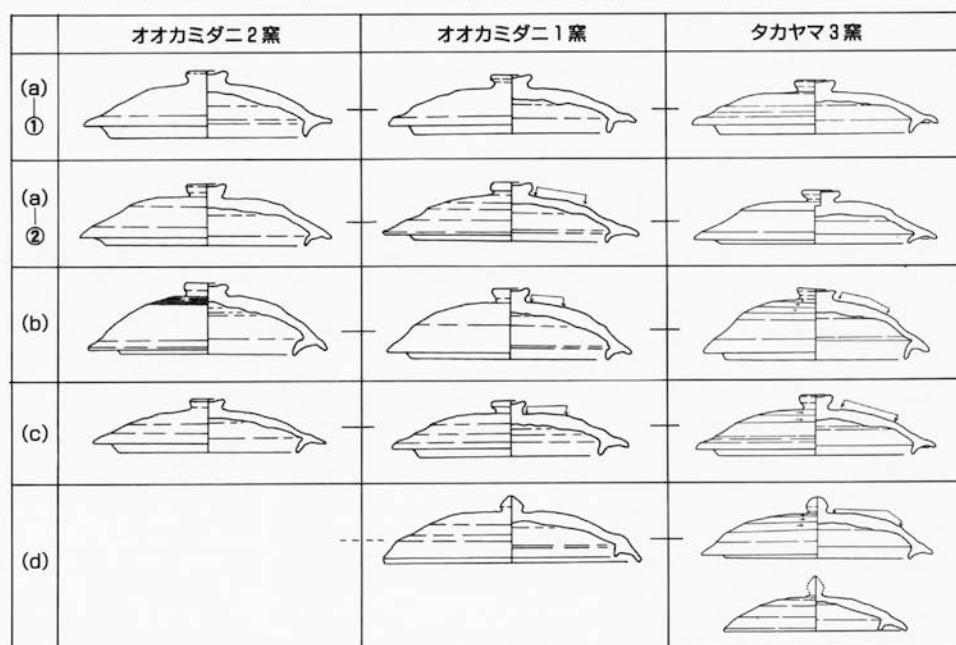
(2) グループ別の須恵器坏B編年序列とグループ間対比

a. Bグループの須恵器坏B変化

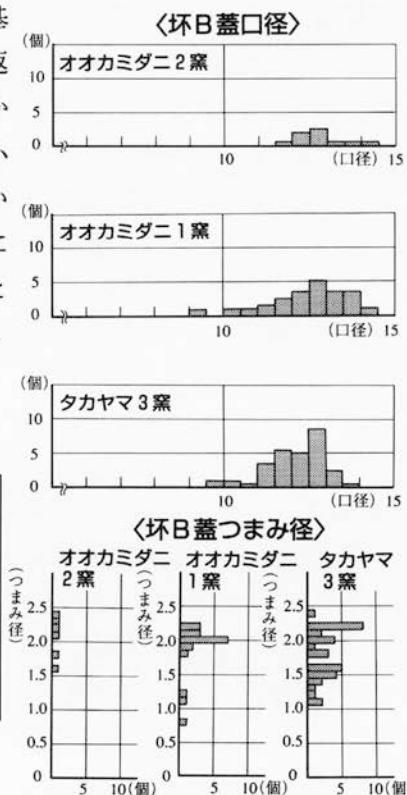
須恵器坏Bの変化として最も目立つのは、段階的な増産であり、それに伴って、新たな類型や法量の出現が見られる。前述したように、当グループの坏B蓋は(a)~(d)の4類型に分類でき、大型偏平つまみをもつ天井ヘラ切りの(a)が3基を通じて主体類型となる。器高高い(b)や小型偏平つまみをもつ(c)は大枠では(a)系に入る少数派、(b)はオオカミダニ1号窯→タカヤマ3号窯で減少、(c)は逆に増加する。また、乳頭状つまみをもち天井削りをもつ(d)はオオカミダニ1号窯で出現し、タカヤマ3号窯で定量を占める類型となる。このような類型の変化はそのまま、つまみ径変遷に現れており、オオカミダニ2号窯→1号窯では乳頭状つまみの出現によって1cm前後縮小し、→タカヤマ3号窯ではそれ

がさらに定量を占めるまでに増加する。また、(c)の増加もつまみ径1.5cm前後の増加として現れており、全体的な流れとしてはつまみ径縮小の方向性をもつが、正確には新型類型の出現と定量化に伴う変化であると言える。このような法量変化は、口径においても確認でき、同様の在り方を示す。オオカミダニ2号窯では比較的一つの口径にまとまる傾向があるが、オオカミダニ1号窯では9~10cm台の小型品が出現し、タカヤマ3号窯ではさらに定着、そしてやや小ぶりの11cm台が増加する。全体的には小型化の方向性をもつものであるが、各類型で口径の縮小が図られるのではなく、小型品の出現、中型品の出現、大型法量欠落という形で、口径縮小していると言え、それは3基の窯いずれも口径12cm台を中心をもつことからも伺われる。また、返りについても同様で、返りの低下が見られるのは、タカヤマ3号窯からと言えるが、全ての類型において見られるものではなく、(c)や小型法量のものに顕在化する。つまり、従来新しい様相として考へている返り低下した小型法量の乳頭状つまみ蓋は、全ての坏B蓋がそれに転換する訳ではなく、特定器種として出現する傾向が強く、(a)系と共存するものと予想する。その時期はオオカミダニ1号窯を走りとして、タカヤマ3号窯の段階で顕在化するものと考える。

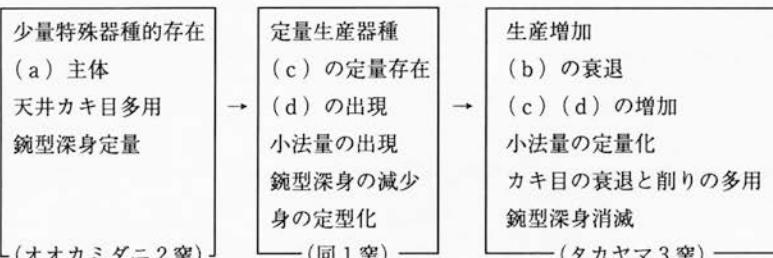
以上の各窯の坏Bの特徴をまとめると以下のとおりとなる。



第151図 林窯群Bグループ須恵器坏B蓋の系統別変化 (1/4) (一部県保存協会1993転載)



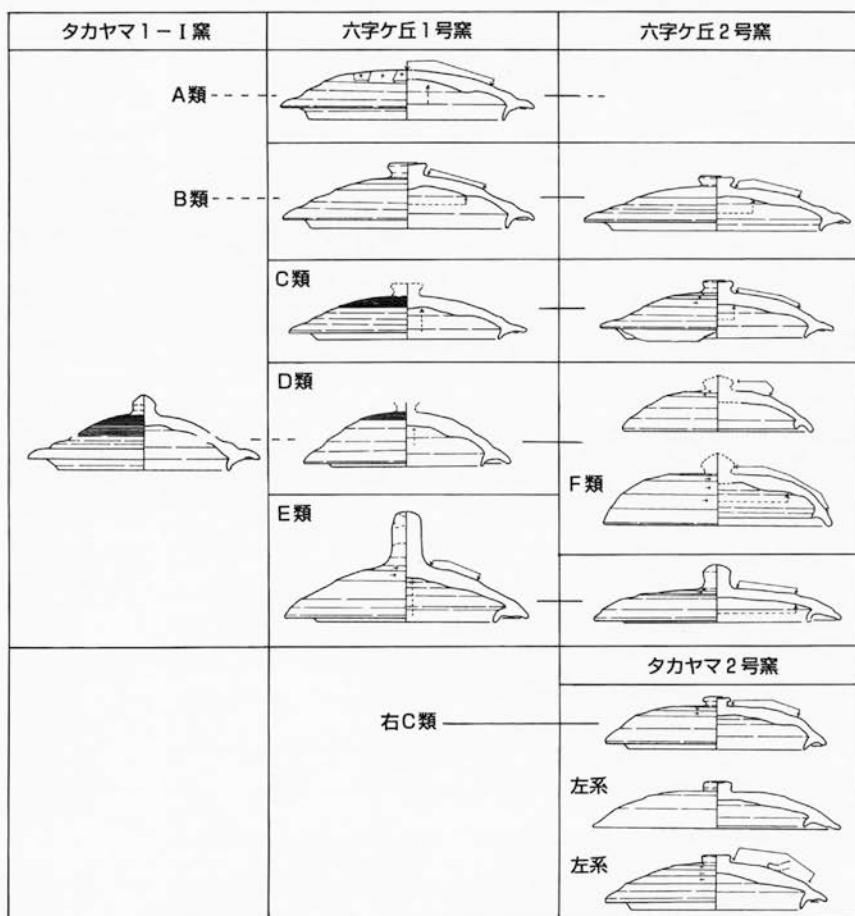
第152図 林窯群Bグループ須恵器坏B蓋法量分布図 (単位はcm)



b. Aグループの須恵器坏B変化

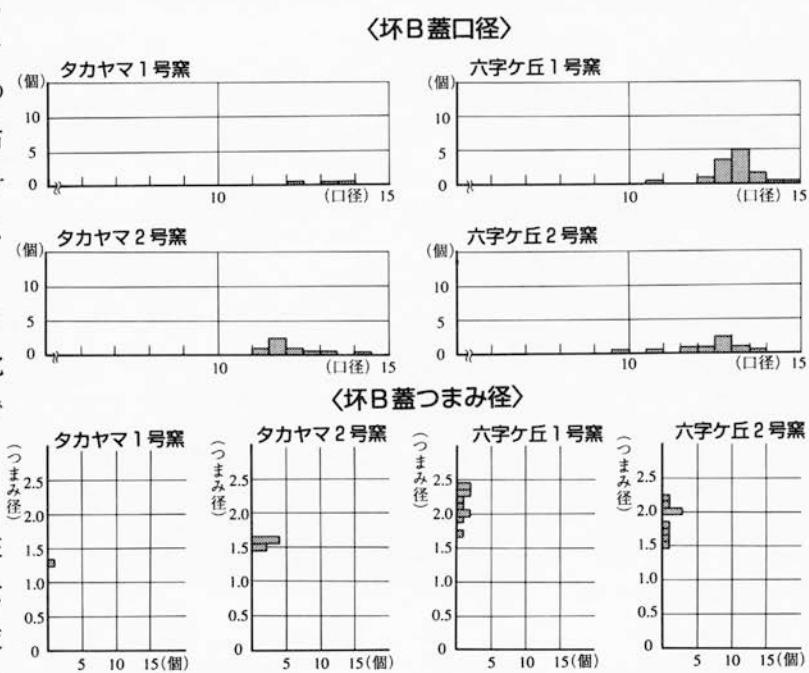
Aグループの坏B生産はBグループに比べて少なく、特にタカヤマ支群での生産が少ない。そのため、ここでは六字ヶ丘支群の中での坏B変化を中心として述べ、タカヤマ支群についてはそれと対比する形で述べる。六字ヶ丘支群の坏B蓋はA~Fの6類型に分けられ、大きくはA、B・C・D、E、Fの4

系統にまとめることができる。主体となるB系はBグループ(a)同様に大型偏平つまみをもつタイプで、C類は(c)系統的な小型偏平つまみをもつもの、D類はB類の小型法量の位置付けがなされる。ただ、Bグループ(a)系と大きく異なるのは、B類が天井部削りを基本としていることで、他の類型を見ても、Aグループでは天井部へラ切りのままというものに限られる。また、Bグループでは確認できなかったA類(無鉢蓋)が定量存在することも特徴と言え、身も椀型を呈することで壊Aの蓋・身逆転形態と言えるものである。A類は六字ヶ丘2号窯でも残存する可能性はあるが、1号窯に主体的であったと予想される類型で、1号窯から2号窯へと口径13cm台が欠落して行くのはA類減少に主な要因がある。口径9~10cm台のD類は1号窯でも確認されるが、2号窯で増加する類型と言え、それに伴って返りも微弱化したものが目立つようになる。Bグループでは当法量の多くは乳頭状つまみの新出系の蓋で占められ、それが乳頭状つまみの増加と呼応する関係にあったが、六字ヶ丘群ではこのような形態のものは顕在化せず、偏平系つまみで占められる。偏平系つまみは、1号窯では径2.0~2.5cmが主体的だが、2号窯では1.5~2.0cmが増加しており、確実に小型化の方向性をもつ。乳頭状つまみの出現・定型化に伴うつまみ小型化現象の流れで捉えられるものであろう。なお、身については体部外面のカキ目と高脚部が付く高脚椀が定量存在することが特徴と言え、それは六字ヶ丘1号窯から2号窯まで一定量を占める。Bグループでは確



第153図 林窯群Aグループ須恵器壊B蓋系統別変化 (1/4)

れ、それが乳頭状つまみの増加と呼応する関係にあったが、六字ヶ丘群ではこのような形態のものは顕在化せず、偏平系つまみで占められる。偏平系つまみは、1号窯では径2.0~2.5cmが主体的だが、2号窯では1.5~2.0cmが増加しており、確実に小型化の方向性をもつ。乳頭状つまみの出現・定型化に伴うつまみ小型化現象の流れで捉えられるものであろう。なお、身については体部外面のカキ目と高脚部が付く高脚椀が定量存在することが特徴と言え、それは六字ヶ丘1号窯から2号窯まで一定量を占める。Bグループでは確



第154図 林窯群Aグループ須恵器壊B蓋法量分布図 (単位はcm)

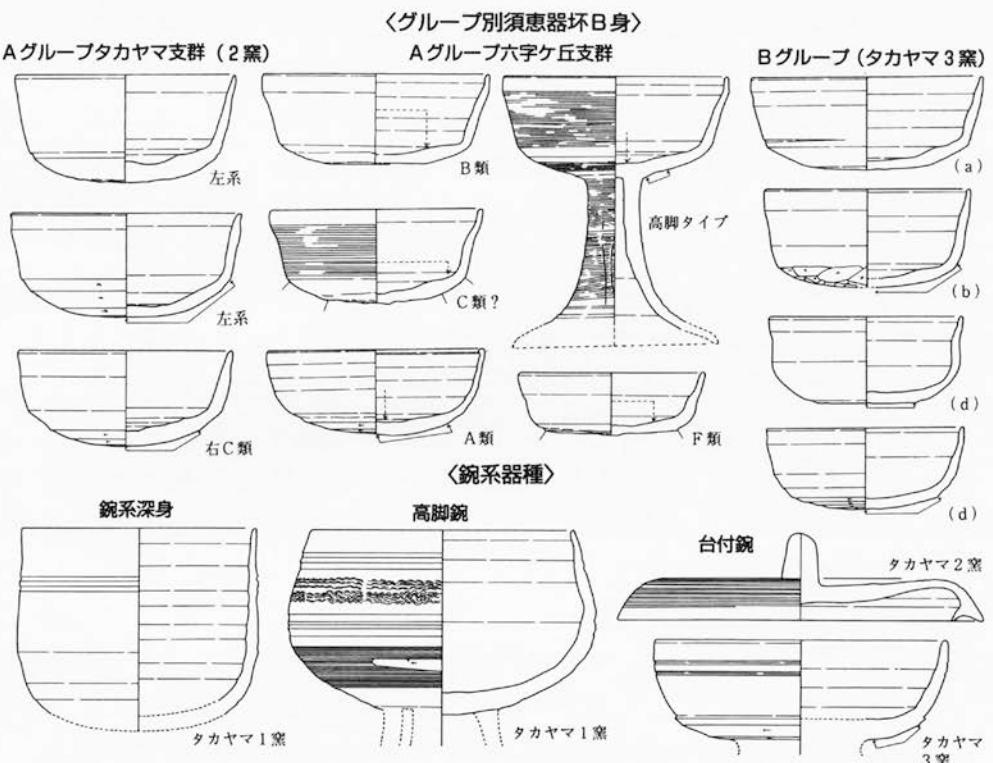
認されないものであり、六字ヶ丘支群産壺Bの大きな特徴と言えるものである。

以上の六字ヶ丘支群の壺B変化を参考に、タカヤマ支群の壺Bを比較すると、タカヤマ2号窯は蓋口径が12cm前後まで縮小していることや偏平つまみが全て小型化していること、返りの微弱化などから、六字ヶ丘2号窯に併行させて考えるのが妥当と言える。タカヤマ2号窯に乳頭状つまみや9~10cm台の小型法量が確認されるのは、このような器種の生産を行っていなかったためであるが、口径18~20cmの鏡系器種に付く大型特殊の蓋が数点出土しており、法量分化の走り的様相をもつ。壺Aから六字ヶ丘1号窯に併行すると予想されるタカヤマ1号窯Ⅱ次窯においては、A類かB類と考えられる破片が出土しているだけで、六字ヶ丘1号窯のような定量生産は確認されない。壺B生産低調はタカヤマ支群の特徴と言えるものであり、壺Aが左回転主体で構成されることと強く関連性をもつものと予想する。なお、タカヤマ1号窯Ⅰ次窯からは乳頭状つまみをもつ返りの大きな小型法量の蓋と鏡型深身器形の壺B身が出土しているが、これは六字ヶ丘1号窯の偏平つまみに先行して存在する初期の乳頭状つまみ蓋で、天井はカキ目が施され、丁寧な作りをしている。普及型の壺Bに先駆けて存在する金属器系の器種として位置付けられるものと予想する。

c. 壺Bから見た両グループの併行関係

これまで林窯群の各グループごとに須恵器壺B編年を述べ、その変化の様相を概観してきたが、両グループともに主体となる壺Bは偏平つまみをもつもので、身の形態も類似するなど、共通する様相をもつ。この偏平つまみをもつ壺Bは、身の形態が安定していることやつまみ器形が在地的と言える偏平型を基調とする点から、一つの器種として在地の中で受け入れられ定型化された普及型の様相を帶びたものと評価でき、林窯群の中で作り出されたものであると予想する。当器種はBグループでは出現期から、Aグループでは六字ヶ丘1号窯段階から定量生産されており、運動性をもつ点で、併行関係が追える器種と判断する。ただ、構成類型や新型導入類型の様相は異なっており、そのまま対比することはできない。普及型の偏平つまみの類型を基本として見て行くこととする。

まず、両グループの最終段階に位置付けられるタカヤマ3号窯と六字ヶ丘2号窯を比較すると、共通点として、返りの微弱化した口径9~10cm台の小型法量蓋の定量存在が上げられる。六字ヶ丘2号窯ではつまみは乳頭状を呈していないが、タカヤマ3号窯の乳頭状つまみをもつものが基本と言え、それまで主流であった偏平つまみ蓋に対して新たに出現してくる器種と言える。底部平たく身のやや浅い新



第155図 林窯群グループ別須恵器壺B身と鏡系器種 (1/4)

たな坏B身が出現するのも当段階であり、坏B最小法量を呈す段階のものと言える。以上のような小法量器種は確認されないが、六字ヶ丘2号窯併行と考えているタカヤマ2号窯も同時期と判断して比較すると、口径11cm台の小型化した蓋の増加や径1.5cm程度の偏平小型つまみの定量存在など、タカヤマ3号窯との共通点が確認できる。返りや器高の低下、全体的な口径縮小傾向なども共通項としてあげられ、坏Bから見れば3基を同型式として位置付けて妥当と考える。

以上を定点として、それ以前を考えれば、六字ヶ丘1号窯がオオカミダニ支群に対応する訳であるが、つまみ径・口径分布を見ると、ちょうどオオカミダニ1・2号窯合わせた数値が六字ヶ丘1号窯の数値と類似する。大型偏平つまみが盛行する時期であり、作りも丁寧で、返りのしっかりしたもののが目立つ点でも共通する。六字ヶ丘1号窯がI次窯とII次窯とに分けられるため、2基分の操業期間をもつと考えれば、オオカミダニ支群の2基と対応関係にあり、それ以前のタカヤマ1号窯I次窯を普及型坏B器種成立前段階と位置付ける。前述した乳頭状つまみをもつ金属器的蓋は普及型坏B器種の先行形態として導入されたものと判断し、特殊器種として組成の中に含まれるものと考える。以上を整理し、併行関係を図表化すると以下のとおりとなる。なお、林窯群の編年序列を3期区分し、鏡系坏B出現期を林1期、普及型坏B成立・盛行期を林2期、新型坏B出現期を林3期と設定する。なお、林2期についてはオオカミダニ2号窯と1号窯の関係から前後2時期に細分する。

工人組織	窯跡支群名	林1期	林2期(前・後)	林3期
		鏡系坏B出現	普及型(在地型)坏B成立・盛行	新型坏B出現
Aグループ	タカヤマ支群	1号窯I次窯	→ 1号窯II次窯(1次床→3次床)	→ 2号窯
	六字ヶ丘支群	(3号窯)	1号窯(I次窯→II次窯)	→ 2号窯
Bグループ	オオカミダニ支群	(+)	2号窯 → 1号窯	→ 3号窯

7. 林窯群須恵器の特徴と編年の位置付け

(1) 林窯群須恵器編年案の提示

これまで林窯群の坏Aと坏Bを編年序列し、各グループ及び窯跡支群の須恵器を対比してきたが、ここで林窯群にあるこれらの須恵器窯の編年の位置付けを行っておきたい。なお、以下で示す器種名について研究史上使用されている器種名との混乱を避けるため、これまで使用してきた「坏A」を坏Hとし、「坏B」の内、鏡系のものを鏡、新型乳頭状つまみ付を坏G、体部外傾してやや大型化していくものを坏Aとする。なお、止む追えず、研究史上使用されている以外の器種名で示す場合は「」で括ることとする。

本稿の冒頭でも述べたように、これらの須恵器組成や諸特徴を見た場合、①食膳具が坏H主体構成であり、鏡ないし坏Gはあくまでも客体的存在であること。②坏Hの成型・調整技法が、古墳時代的技法(同心円当て具を使用するなどして底部を大きく作り、ヘラ切り後に削り調整で丸底に仕上げるもの)から、新しい底部丸底切り離し技法(成型段階で切り離し面を予めヘラ差し込みや強いナデでえぐりを入れることによって、丸底化してから切り離す技法)に転換していること。③平瓶などの新来器種や金属器的器種(鉢類)、朝鮮系と呼べる器種が存在していることなどの点から、田嶋編年でのI1期の範疇に入ると考えられる。I1期はさらに坏Gの前身と言える鏡系の定型器種が成立するか否かで古・新に細分されており、林1期を定型化する以前の鏡系器種導入時期と考えれば、他の時期とは分けて、古段階として設定可能と考える。南加賀窯跡群南群の分校3号窯や那谷金比羅山1号窯を古段階の標識資料とすることから考えても、ここに位置付けるのが妥当だろう。そうなると、林2・3期がI1期新段階に位置付けられる訳であるが、ただ、南加賀窯跡群の特に林窯群の坏Hは身口径が10cm未満で占められ

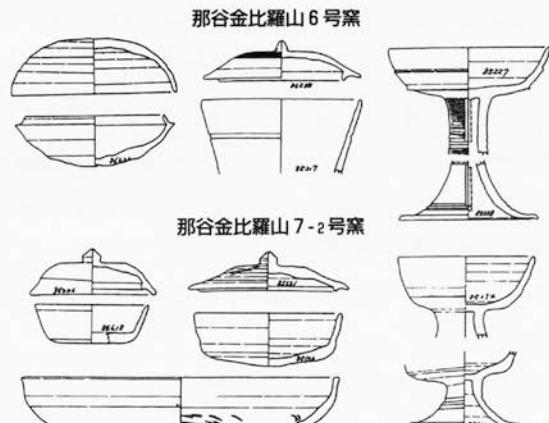
ることではなく、坏Hが最小口径に縮小しないまま消滅する地域性があり、I2期の指標と言える小型化した坏Hが存在しないことを考え合わせると、当組成の最終段階に位置付けている林3期は、I2期に下る可能性もある。田嶋氏はI2期の指標として、坏Gの出現を上げているが、坏G自体が組成の中心を占めないまま、新たな器種組成に転換して行く窯場も存在した可能性は高いと考える。筆者は先に示した「坏B」変化を「鏡系坏B出現段階」とそれが在地化され組成の中に浸透して行く「普及型坏B成立・盛行段階」、そして普及型増加とともにそれに交替する形で新たに組成の中に加わってくる乳頭状つまみをもつ「新型坏B出現段階」の3段階に分けたが、田嶋氏の述べる坏GはII1期へ展開する器種である理解から考えれば、筆者の示した「新型坏B」に該当するものと言える。林窯群の中で坏Gに組成の主体があるような窯が存在しないとは言い切れないが、坏Hの形態変化の有り様や組成の中心を保持し続ける様相などからそのような窯が出現してくるとは考え難く、当窯群においてはこのようなI1期の延長線上にある組成でI2期の様相が形成されていたと考えるのが妥当であろう。なお、林3期にはタカヤマ2号窯で口径18cm台を測る法量分化の走りと思われる大型鏡の蓋が出土しており、また、六字ヶ丘2号窯やタカヤマ2号窯の無蓋高坏に無スカシ脚部をもつ次代へ繋がるような形態が存在することもその証左となろう。

これ以後も、林窯群では坏G主体となる窯の存在は確認されておらず、II1期に該当する窯が空白である。次代にはII2期の中でも古段階と位置付けている六字ヶ丘4号窯が存在するが(12ページ参照)、この窯では明瞭な坏Gは確認できず、体部外傾器形の有蓋坏Aで大半が占められ、定量の無返り蓋と少量の坏Bがこれに加わる組成をもつ。坏Hの存在は確認できておらず、基本的に同時期の消費地資料においても欠落ないしは減少する器種と言える。林3期の坏H主体構成からすぐに六字ヶ丘4号窯のような型式へ変化したとは考えていないが、六字ヶ丘4号窯直前までは坏Hが残存する可能性はあると考えており、両者の折衷的な型式を間に短期で挟んだ後、II2期へ移行していくものと予想する。このような型式の時間幅の違いは、当窯群に近接し、須恵器供給が確認される消費地資料(額見町遺跡)でも確認される。南加賀窯の中でも特に林窯群においては、I1期とII2期の時期幅が長く、間に入るI2期とII1期は短期で型式変化し、また、窯によっては、前代の様相を色濃く残すばかりに、坏H主体組成から坏G主体時期を挟まずに坏A・B主体組成へと急激な型式転換をして行く窯も存在した可能性を考えておきたい。

(2) 該期北陸諸窯の様相と古代I2期・II1期の評価

これまで林窯群須恵器を既往編年に位置付けてきたが、林窯群の特徴を明示するためにも、当該時期の北陸諸窯の須恵器と比較してみたい。

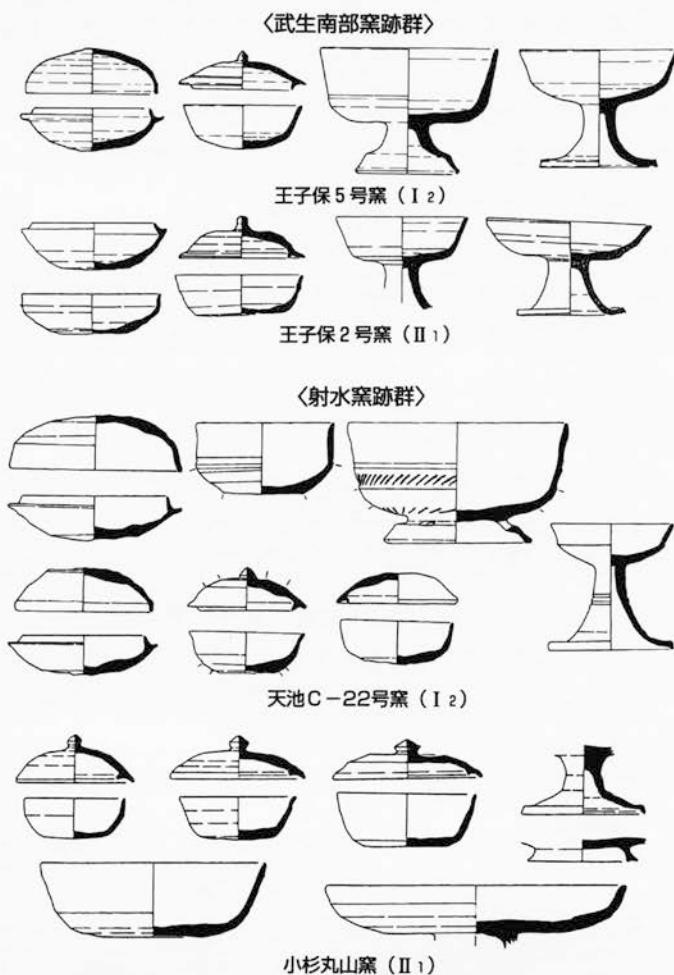
まず、同窯跡群に位置する南群(動橋川流域地区)の須恵器と比べると、那谷金比羅山窯の坏Hや法皇山横穴群資料を見る限り、一部の窯を除いては坏HがI2期に入っても身口径で10cm未満の小型化を指向せずに、12cm台前後を推移する特徴をもつ点で、林窯群と類似する。鏡系器種の定着する時期や入り方も類似性高いが、鏡系器種が定型化する段階で、林窯群が偏平つまみを指向するのに対し、南群は乳頭状つまみをもち、I2期に定型的な坏Gの出現を見る(金比羅山11号窯)点で相違点がある。また、林窯群の高坏脚部2



第156図 I1期新・II1期の南加賀窯南群須恵器(1/6)
(望月・福島1988より転載)

段3方スカシのI₁期新ないしはI₂期までの残存現象や越・提瓶生産の持続など、南群よりも保守的様相が強く、林窯群に比べれば、南群は鉢蓋のつまみ形にしても、先進的ないしは柔順と位置付けできる。林窯群の鉢系壺の形態を在地的と表現してよいか疑問もあるが、南群の鉢や壺Gは中央指向であることは間違いない、金比羅山7-1号窯で削りを多用し、蓋に稜を形成する尾張猿投窯系の壺Hが生産されていることを考えれば、南群は林窯群よりも他地域からの技術移入が明確に認められる窯場であると評価できる。I₂期に南群で壺Gが増加する様相は恐らくないと予想するが、南群ではII₁期に那谷金比羅山2号窯や7-2号窯のような、壺G主体組成が確実に存在する。このような組成は、林窯群でも短期形成される可能性はあるが、II₁期の比較的古い段階で金比羅山2号窯のような壺Gと壺I（壺H蓋逆転型の無蓋壺、菱田1997）で器種構成される窯は林窯群では存在しないものと言える。南群は林窯群よりも7世紀後半の壺A・B主体構成の型式の間に明瞭な壺G組成の時期を挟む点で、より中央的と言えるだろう。

以上、南加賀窯内でも当期の須恵器様相は微妙に異なる訳だが、北陸諸窯と比較するはどうであろうか。調査されている須恵器窯が能美窯跡群と越前武生南部窯跡群、越中射水窯跡群に3カ所に集中するため、上記3窯の資料を中心に述べて行くが、まず、I₁期については、壺H法量や鉢系器種の入り方など共通性高く、同時期に各地で広範囲に型式転換していることがわかる。ただ、その中では林窯群の鉢系器種の定型化の在り方や高壺等在来器種に古相を残す特徴は他では確認されないものであり、独特のものと言える。南加賀窯はこれ以後も地域性を根強く残して行く強い保守性をもつ窯場であり、当期の様相はその一端を垣間見せている。鉢系器種の定型化も新出器種を地域の中で素早く還元し、地域の型を作り上げて行く南加賀窯の特性がよく現れたものと言えよう。次に、南加賀窯では顕在化しないI₂期の様相であるが、小型の新型壺G出現を指標とすると、能美窯の地



第157図 I₂期・II₁期の武生南部窯及び射水窯須恵器 (1/6)
(武生市1987,1992及び小杉町1993,池野1995より転載)

藏谷窯（未報告、平成9年小松市調査）、越前武生南部窯王子保5号窯・広瀬3号窯、越中射水窯天池C22号窯が該当する。いずれの窯も壺Hに小型化指向が見られ、身口径9cm台にまとまる傾向があり、無蓋高壺は脚が低下してくる。構成は壺Hが過半数を占め、壺Gはあくまでも客体で存在しているが、II₁期に限りなく近づく段階で壺Hの比率低下がおこる可能性はある。ただ、その段階は壺G以外に主体的に生産される器種が存在していたと予想しており、壺Iなどがそれに該当するであろう。そして、II₁期には小型壺Gを型式の橋渡ししながら、新たに法量分化した蓋壺が登場してくる。この蓋壺を壺Aと呼ぶかどうかについては、田嶋氏のような明確な根拠をもっていないが、II₁期の蓋壺の法量分化は、I₂期から続く小型壺Gと新たな壺Aの組み合わせによるものであり、この組成を中心として構成

されていたものと言える（越前武生南部窯王子保2号窯、越中射水窯小杉丸山窯）。また、北陸では顯著とは言えないが、当期には確實に新出器種として壺Bが登場してくるし、Ⅰ期の名残として壺Hが残存する。ただ、壺Hの残存は蓋身セットであることは少なく、蓋のみが無蓋身（壺I）として継続生産される。このような組成をもつ窯は、これ以外にも、高松押水窯跡群や能登羽咋窯跡群、鳥屋窯跡群など北陸一円で確認されていると言ってよく（羽咋窯や鳥屋窯については古墳資料であり、一般集落や生産地ではこのような組成をもたない可能性もある）、林窯群のⅡ1期資料が落ち込むような様相は北陸の中では異例と言える。ただ、武生南部窯の王子保窯D地点に見るⅡ2期の窯の増加（小淵1995）や純粹なⅡ1期資料よりもⅡ2期資料が目立つ傾向があることは、北陸一円で言えることであり、Ⅱ1期に対して、Ⅱ2期の時間幅を広く捉えられる点では南加賀窯と同様と考えている。

Ⅰ2期やⅡ1期、つまり壺G主体となる型式が目立たない地域は北陸を除くと、意外に多く、和泉陶邑窯、東海尾張猿投窯を初めとして、畿内周辺部諸窯でもそのような須恵器組成をもつのが一般的である。壺G器種は存在していたとしても、壺Hが定量を占める状況にあり、Ⅱ1期の後半にはかなりの確立で壺Bが組成の中に加わり、法量分化してくる。このような型式変化の流れとして、7世紀の須恵器は、壺H主流の時代から壺B主流の時代へ移行し、壺G主体の組成になる時代はなかったとされており、そう考えれば、北陸の7世紀代須恵器に見る、新出器種のスムーズな移入と、旧来器種のいち早い放棄は、「畿内以上に畿内的」（田嶋1997）と評されて然るべきである。このような須恵器組成が存在した背景として、7世紀前半代北陸で施策的に展開された一郡一窯的な窯場配置（移植）が上げられる。これらの須恵器生産地の多くは、7世紀から始まる新興生産地であり、6世紀初頭頃に単発的に出現する園カンデ窯や羽咋柳田ウワノ窯（鳥屋窯跡群も6世紀後半代に生産が途切れる可能性がある）を除くと、6世紀代から継続生産される窯場は南加賀窯と越前金津窯の2カ所のみと言ってよい。つまり、北陸の中で、南加賀窯のような6世紀代から継続生産される窯場は異例であり、特に6世紀代の生産グループが移動してきたと予想される林窯群は、伝統的な器種の生産を続けるような保守性高い窯場と位置付けられよう。これと対比して、新興的と評した那谷金比羅山窯などの南群は、その成立に外部からの技術移植が想定される窯場であり、その違いが新来器種導入や伝統器種払拭として敏感に現れたものと言えよう。後に越前国府が置かれる武生南部窯跡群や越中国府が置かれる射水窯跡群は、官主導で新興開拓地に意識的に設置された窯場であるわけで、そのような新来技術移植という点では典型的な在り方を示し、その結果、中央の様式をかなり純粹な形で投影していると言える。中央政府が主導する東日本向けに展開した地域政策のモデル的在り方と評価できるものであり、それが「畿内以上に畿内的」であったのはその政策性から考えれば、当然の結果であったと言えるだろう。陶邑窯や猿投窯の7世紀代須恵器型式が南加賀窯のような理由によるとは言い切れないが、7世紀前半に新規開発型の窯場で新型窯構造である排煙調整溝付窯が採用されるのに対し、5～6世紀に主導的役割をした拋点窯である陶邑窯や猿投窯でそのような窯構造が顕在化しないのは同様の理由によるものと考えられないだろうか。複合的な要因はあるが、要因の一つとして上記のことが上げられるだろうと予想する。

8. おわりに

本稿はこれまで報告された戸津・林地区の7世紀前半代須恵器窯の完結編として、窯と須恵器を再整理したものである。その中では、7世紀に再編された戸津・林地区須恵器窯の工人組織の在り方やその方向性、そして須恵器編年再考を通して、南加賀窯の地域性を考えてみた。当窯場の完結編と銘打ちながら、時間的制約や紙面の都合、筆者の力量不足から十分な検討が行われなかつた部分も多い。目指したものは高かったはずであるが、志し半ばの感は拭えない。このような仕事を再度試みる余力はないが、

数年後には7世紀代の消費地資料（額見町遺跡）を報告書でまとめる機会があるため、その折に7世紀代の土器様相については再考したいと考えている。難解な長文のため、論旨の理解を求めるのはおこがましいが、先学諸兄のご批判、ご叱責を受けられれば幸いである。

最後になったが、本稿を草するにあたり、戸津六字ヶ丘窯の資料提供をいただくとともに、再検討の機会を与えていただいた宮下幸夫氏と林オオカミダニ窯資料実見の機会をいただいた久田正弘氏、沢辺利明氏、また、日頃から助言を戴いている北野博司氏に心から感謝申し上げる。

引用参考文献

- 池野正男 1995 「越中・射水郡の7世紀後半の社会」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
石川県埋蔵文化財保存協会 1993 『小松市林遺跡』
上野 章 1993 「富山県における生産開始期の須恵器窯跡について」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
宇野隆夫 1993 「推古朝変革論」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
木立雅朗 1991 「加賀・能登における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会
北野博司 1993 「「加賀」の須恵器生産における7世紀初頭の画期」『北陸古代土器研究』第3号 北陸古代土器研究会
久保智康 1991 「越前・若狭における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号 北陸古代土器研究会
小杉町教育委員会 1993 『小杉町埋蔵文化財発掘調査一覧 1992年度』
古代の土器研究会 1997 『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器－』
古代の土器研究会 1997 『古代の土器5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』
古代の土器研究会 1998 『古代の土器5-2 7世紀の土器（近畿西部編）』
小淵忠司 1995 「7世紀後半の武生南部窯跡群」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
小松市教育委員会 1993 『戸津古窯跡群Ⅲ』
武生市教育委員会 1987 『王子保窯跡群 第1次発掘調査概要報告』
武生市教育委員会 1992 『王子保窯跡群Ⅳ』
田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』 北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
田嶋明人 1997 「北陸での7世紀の土器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器－』 古代の土器研究会
田辺昭三 1981 「須恵器生産の展開」『須恵器大成』 角川書店
菱田哲郎 1997 「近畿地方西部・山陰・山陽」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器－』 古代の土器研究会
望月精司・福島正実 1988 「南加賀古窯跡群の概要」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（資料編）』 北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
望月精司 1991 「須恵器食膳具3類型とヘラ記号」『戸津古窯跡群Ⅰ』 小松市教育委員会